



愛をこころ、人はそれぞれの胸の中に秘めた想い・・・

歳月は誰もが等しく過ぎて行く・・・

(一)

走る車がさほど多くない平日の長野自動車道を佐久インターで降りて、一般道をゆっくりと走る・・・

爽やかな初秋の風が、少しだけ開けた車の窓から心地よく、久美子の頬をなでて行く、ひさしぶりに握るハンドルは心なしか、伝わり来る振動が腕に重く感じた。

今から向かおうとしている場所は、久美子にとって、故郷とは言いがたいけれど、私の育った場所である事は確かな事！

ひと月近く、束縛されて、見えない、心の自由を奪われているような、病院での限られた空間で過ごして、来る日も、来る日も、検査と薬に頼り、気に添わない病院暮らしで、久美子の体は予想していた以上に体力と気力が落ちていた、やはり、外の空気や、景色に触れられる事は、気持ちの良いものだ。

元々、久美子はどちらかと言えば、気ままな人間だ！

特に急ぐわけでもなく、すれ違う車も少ない、ゆっくりと車を走らせていく！

久美子は今、何も考えずに、前だけを見て進む！

六十五歳の今日まで、平凡な暮らしを少しだけ、避けて、生きてきたのだろうか。

あの大切な思い出の中に入り、あの日に帰ってみる！

「幼かったあの頃、寂しかった日々」

「そして、孤独で、多感な少女時代」

そう、私は、十八歳の早熟な愛を感じた日も言い知れぬ不安と孤独でこの胸がつぶれそうな思いだった日々・・・

私がここで暮して、大人に成長して行った場所だ！

何かを、思い出そうとして、考えなくても、直ぐに浮かんで来る。

「私の大好きだった母のいた場所！」

久美子には無条件で優しくあった母の姿は、もう、何処を捜しても見えないけれど、それでいて、いつも、私を見守ってくれる。

「遠い存在の母！」

『母の顔』

『母の姿』

あの優しくった母は、この青い空の何処かで私を見つけてくれるのでしょうか？
セピア色の思い出が描き出す写真のように、遠景の山々の姿も、どこか、古ぼけて見えていた、幼かった私と母の笑顔だけが懐かしくおもい出す、今、向かおうとしている場所は、特別で美しい感情にしてくれる私の大切な場所なののでしょうか？

ただ、寂しくて、悲しくて、貧しくて、ひとりの泣き虫な私の居た場所！
いつも母の姿を追い、懸命に母にすぎた、辛い記憶だけが浮かぶ、私が育った故郷！

幼くて、孤独だった、あの子供の頃、私はいつもひとりだった、心が満たされる事のない記憶はただ虚しい！

けれど、あの人が、突然、私の前に現われた時、私の愛は全速力で走り出した、大きな愛に出会った時、未熟な私は変わってしまった！
私に愛の素晴らしさと苦悩をおしえてくれた人！

私の人生の全てを賭けて、愛した、切なく、激しい想いが私に混乱と狂おしい感情が生まれた！
。
何もかもが未熟だった青春の日の出逢い！

『たった、十七歳の出逢い』

幼すぎた愛を貫く事を知った場所、そして、運命を変えた愛が私を虜にした場所！
田舎道特有の細い車道は、くねくねと幾重にも曲がりゆるい坂道は何度も繰り返しのぼる、やがて、見覚えのある風景が私の目の前を通り過ぎて行く、ハンドルを握る私に否応なく、迫り来る記憶、まばたきをした一瞬に、いつの日か、遠い昔に体験して・・・

メリーゴーランドに乗って、回転して行く、優しく揺れながら、移り変わって行く、風の波に泳ぐ世界で、夢の中のけしきが揺れて動くように、錯覚さえしてしまう、ぐるぐるとまわりながら、私の視界の中で、不思議な感覚が通り過ぎて行った！

柔らかい風と車窓から受ける少しだけつよい風が重なり合う感覚に、私は夢の中でドライブするような気持ちで楽しんだ道の両側から色とりどりのコスモスの花が、今を盛りに初秋の光をうけ咲き誇る、美しい花の波を描き輝きながら、揺れて波打つ、かぜ色の悪戯！

走らせる車はゆっくりとした速度や震動が、とても気持ちよく、わたしの体につたわり来る！

「キラキラと輝く虹のように」

淡い帯状の薄絹をなびかせる風の仕草が美しい風景を絶え間なくつくり、ゆっくりと、通り過ぎて行く六十五年の私の生きた日々は、確かな鼓動として私に命を伝えてきた、今、久美子の心は、いい知れぬ切なさに浸る！

「突然の熱い想いと感情」

「ああ～なんて美しい」

この胸が一瞬、苦しいほど、キュンとなり、目頭が熱くなった！

坂道をすこし走って、小さな台地に、車を止めて、昔の我が家があった場所を眺めてみた、幼かった頃、私はいつも母のそばを離れなかった、母はつねに忙しく働き、体を動かしていた人だった。

その母の後をついてまわり、私は母を困らせていたのかも知れない！

やがて、私がひとりで過ごせる頃には、母はこの世からいなくなった。

蒼ざめた気の弱い不安を隠して、私の顔は、見えないゆがみと似合わない大人げた眼差しをみせて、微笑む！

その寂しさを慰めてくれた場所があった！

いつ、どんな時に、その場所を知ったのか、誰かに、おしえられたのか、どうかも、忘れてしまったが、私には生涯、心の中で大切にしている風景がある！

『秘密の花園』

あの場所に行く、私は、夢の世界で、特別に母に会える気がしていた、確かに、母の姿は、見えないけれど、あの花園では、心に囁く母がそばにいて、話しかけてくれた！

長く、暗い冬がすぎて春、雪解けと共に、花園は、美しいピンク色の世界に変わって行く、子供だった私には、そのピンク色の花の名前は知らなかったけれど、大人になってから知った。

「桜草の花」

香しい匂いが母のにおいを感じて、雪解けを待ちかねて、私は、あの特別な場所「秘密の花園」

へかけて行った！

十八歳になって、この地を離れる時まで、誰にも知られずに、久美子は通い続けた、久美子が夢見る世界、魂を自由に出来た、母の思い出と共に大切に忘れられない風景・・・

「秘密の花園」

夏は、真っ赤に熟れたグミの実をたべて、時を忘れて、過ごした、楽しい場所だった。

秋は、色いろどりの木の葉が、私に美しい絵の世界を描かせてくれた。

私が育った頃は、誰もみんなが忙しく働いていた、あの、私の父以外の人は、頑張って働かなくては、生きて行けない時代だった！

仕事の選り好みなどしてられない、貧しくて、ひもじさを満たすために、みんなが必死で働いていた、そんな中で、私の父だけは、異質な人だったから、子供ながらも、父の姿に、戸惑いと嫌悪感を持って成長した！

六十五歳の今、私は別の世界へ旅立とうとしている、そして少しだけ先に行ってしまった、あの人に、出会えるのだろうか？

残忍なまでに、あの頃に立ち戻る、あの、くすんだ暗く古い粗末な建物が、私の感情を占領した、思い出したくもない！

「子供から大人へ導いた日々を！」

「やはりここは私の故郷なのですね！」

けれど、決して、懐かしさからの感情ではないと、久美子は心の中で否定してみた、長い時間をへて、この風景を観て、なぜ、こんな思いになるのだろうか、この地は、母との思い出と共に私の大切な場所だった！

「秘密の花園」は、もう、とうの昔に消えてしまった。

久美子が思い描いていた、所には、近代的で、洋風な邸宅が建ち、小さな公園が見えている、そして、見渡す限りに広がる、田んぼや畑に変わってしまったのでしょうか。

(二)

私の病気は否応なく進んで行き、心も体も弱りきって、孤独に耐え抜いた今も、何かが足りなくて、どこかに何かを、置き忘れて来た気がする、まだやり残した事がある、そんな思いと、もう十分に頑張っただけ生きてきた。

「素晴らしい人生だったとも思える」

少しだけ混乱している私の気持ちは、はっきりとした、私の病気の観念がないような、病院を出てからは記憶と時に起きてくる激しい痛みが、久美子自身の今を思い出させて、こんな感情が、私を試しているのかわ？

これからの久美子のなすべき行動を現実に実行出来るのかと！

何かに問われている、そんな気もした！

「自分ではもうこれ以上の何の未練などない！」

「もう誰にも、迷惑をかけられない！」

そう硬く決心しての旅立ちだったはずなのに、このあまりに、美しい風景に、私は、なぜか、まだ、全てが終わったわけではなく、他のちからが、方法があり「生きる目的が出来るような気がした」

私には、特別なエネルギーが授かる方法が残されているように思えて、微かな、生きる望み、欲望が、この脳裏をかすめている事に、久美子自身が驚いていた。

もう、この地には、会いたいと思う人もいない、久美子を暖かく迎えてくれる家族も、身内といえる人も、誰も住んではいない、父と母の眠るお墓を守ってくれる人のいない場所になってしまった。

けれど、こんなにも、久美子の育った、故郷が美しい所だったと、改めて気づいた！

久しく帰っていなかった、故郷に来て、六十五年の歳月を生きた、自分を見つめている、今、自分の命が終りに近づいている事が真実なのかと、疑いたくなってくるほど、穏やかな時間が過ぎて行く！

久美子は、ここ数年の苦しみと孤独、痛みが、何かの策略にでもあったかのように、夢の中での事のようにも、思えるほど、久美子は安らいだ気持ちと少しだけ心が混乱する気持ちを意識して、遠ざけて、見ていたかった！

今、自分の中で起きている事を、そのすべてを受入れられるのだろうか、再び問いかけていた。

。

「短く、儂い時間」

「ひとりの人生は大自然の中では、一瞬の輝き！」

すべてが浄化された自分が、ここにいるのだと思いたかった。

思えば、長くひとりで生きてきた久美子には、家族という存在がないに等しい、久美子自身の心の不安定さを、仕事に打ち込み、夢中で頑張っていた時期は、寂しさもさほど、気にする事もなかった。

時折、わけもなく感じた孤独感も、いつしか気づかない内に忘れてしまうほど、日々の忙しさが久美子には喜びにさえ思えてしまうほど、偽りの自由に生きる事が、あたりまえの事のようにすごせていた。

四十歳を過ぎた頃から、時折、体調を整える事に時間が少しずつ長くなって行った事が、かすかな気がかりではあったけれど、いつしか、そんな事も、あたりまえの事と自分の中で消化して行った。

少なくとも、あの突然の痛みが全身に走り、意識が遠のいて行く、あの日までは！

天と地の揺れ動く不快さと耐え切れない激しい痛み、引き裂かれ、砕けてしまいそうな体はやがて、すべて、闇の中で、私は消えてしまった。

「意識を取り戻した時は病院のベットの中だった」

それからの数日はまるで、私の体は次々とおこなわれた検査で全身が壊れかけて行く、そんな感覚で、ベットから起き上がれないほど、体調が悪く、完全に病人に変身させられてしまった！

少なくとも、私は、あの日までは元気で、日常生活の出来る体だったはずだ、仕事に支障をきたすほどの不健康な状態ではなかったと、心の中で、久美子は自分の体の変調に抵抗していた。

久美子は仕事をする時は、ひとりの社会人として、最大限、力を注いでいた。

ところが今はどうだろう、自分の気持ちとは押し量れない、不自由さが、私を支配している。

久美子自身、体調の変化を受入れられずに、もがき、苦しむ事も出来ない、不快感と気力の低下を実感して、落ち込んでいる。

初めて体験する、心と体に重い荷物をくくりつけているようだった、ベットから起き上がる事がこれほど、エネルギーの要る事だったと思い知らされた。

あまりにもいっきに体力が落ちてしまい、情けない状態だった。

約、一月の入院生活で、それからの私の運命は大きく変わってしまった。

病院のベットの中で、私は、すべてのエネルギーの抜け落ちて行く夢を、何度も、何度も、みていた、説明の出来ない不安感と微かな体の痛みが続く・・・

時折、浅い眠りからめざめて、ただ、ぼんやりと、横たわるベットから視覚に入ってくる、天井の薄黒く、汚れたシミが、私に襲い掛かってきそうなほど、揺らぎ、動く怪物に見えてきて私は思わず、この体を緊張させて、硬く、小さく体を丸くして眼をとじて、通り過ぎて行く、恐怖感をやりすごしていた。

やがて、検査の結果が出たと、担当医は、無表情に伝える言葉に私は、不思議なほど、驚きも、不安も、怖さもない無表情で、他人事のように聞いていた、体に起きている不快感とは別の人格があったのだろうかと思える。

少し時間が過ぎて、ドクターの話した言葉、ひとつ、ひとつを思いだすように、自分の事として、現実には起きている事として、受入れるしかなかった。

それでも、病院の担当医に、私はわけの分からない事を心の中で言いかえして、抵抗を試みている私の体には！

「ガン細胞などより着くはずがない！」

ただ、そう自分につぶやき続けていた、それほどまで、私は現実を受け入れる事が出来なかった。

けれど、心の何処かで、無駄な抵抗だと、はっきりとした意識も、確かにあったのだと思う久美子はあの激しい痛みで、意識をなくして病院へ担ぎ込まれるまで、時おり、酷いめまいが起きて、背中の中鈍い痛みがあるだけで、四十年以上働きづめに働き、ひとり生きてきた自信があった、結婚もせず、いや、望まなかった、久美子の心にある、言葉に出来ない！

「あの人への深い想い」

消す事の出来ない、強烈な記憶が

『私のすべての感情を支配していた』

世間では一流だといわれた、杉丸商事に、短大を卒業して、事務職から始めて、商社員として、勤めて、定年をあと一年を残して退職した。

久美子が商社に就職した頃は、女性社員は、必ず、同じ職場の方々にお茶を出すサービスからが、最初の仕事の、決まりごとのように、その頃の久美子は、何もわからず、指示されるがままに、無我夢中で仕事をして、毎日が過ぎて行った。

世間一般での見方は、杉丸商事と言えば、海外でも知られている一流の総合商社だ。
もちろん、世界中の国々と取引のある会社だが実態は、封建的で
「男性優位社会で、学歴社会だ」

久美子が事務職を数年勤めていた頃に
「男女雇用均等法が制定された」

そんな中で、久美子が勤める、杉丸商事でも、名ばかりの、男女雇用均等法の実力主義を取り入れはじめていた。

けれど、まだ、まだ一握りの女性社員にだけ認められた、狭き門であって、一般の女子社員には「高値の花」だと思わせる、一流の大学を卒業した女性社員にだけ、認められた事だった。

狭い世界での事、久美子はその頃、真面目に仕事をしてはいたが、それほど、仕事に対して情熱を持ってなかったし、仕事に満足して生きてきたわけではなく、私学の短大の卒業だから、久美子は身分にあった、与えられた仕事が出来ていれば、それでよかった。

それでも、若く、情熱を持って、仕事に生きがいを持てた時期も確かにあった。

若さゆえに、無謀とも思える事であっても、全力で取り組めば、叶えられる夢をみる、そんな時期だった！

あれは、三十代から四十代にかけて、久美子は仕事や世の中の仕組みに強い矛盾を感じた出来事があった。

久美子は、何か、今の自分を変えたくて、ある企画書を上司に提出した。

だが、受け取りはしたけれど、久美子の企画としては、認めてはくれず、あろう事か、久美子の企画は、同じ職場の男性社員の提出した企画の物として企画は認められて、仕事として進められた。

久美子はなぜ、自分の考えた企画が他の人の物になってしまうのかを、抗議しても、簡単に拒否された事が、久美子の心を酷く傷つけて、人間不信になってしまうほど気持ちが落ち込んでいた。

その事があってから、何かにせきたてられるような思いと、自分の能力の有無がどれほどのものか知りたいと切実に思った時期があった。

それは、いつも、久美子の心を支配し、久美子の中心にいて、語りかける「存在」が苦しかった。

この「存在」を、もう、取り除いてもいい時期だと、その頃の久美子は思っていた。
その存在を排除出来るチャンスのようにも思えて、久美子自身を変えたいと願っての事かも知れない！

とにかく、久美子は生き方を変えたいと思う時期でもあったのだが・・・

眼に見えぬ存在

言葉を交わせぬ存在

心だけが大きくする存在

時として苦しい存在

未熟だったあの日の存在

ただ穏やかに生きて行く

時を重ねて少しだけ

大人になった私に

重い存在が心を支配する

(三)

久美子は故郷で、少しは名の知れた高校を卒業した。

その頃、可能な事であれば、東京の私立大学に行きたかったが、現実には久美子に深い悩み、苦しみもあった事、又、私学に行けるほどの経済力も無い事で、その頃の久美子は、自分の置かれている立場に流されて生きるしか自分の出来る事はないのだと、諦めていた。

日々、久美子の心を捉えて、離さない、姿こそ見えないけれど、いつも心の中にいる「春馬」への愛に溺れそうな切ない想いも又、久美子の生き方・・・

その頃はすでに、母は亡くなって、姉夫婦が家を継いでいた。

そして、父の事を話さなくては、この物語は前へ進まないけれど、久美子が高校を卒業出来た事は、経済的な面や家庭の置かれていた状況を考えただけでも、奇跡的な事だった。

だから、久美子は、高校卒業と同時に、故郷を逃げるような思いで、松本に出て就職した。

その理由は、後に話すことになりますが、久美子は十八歳の時に、久美子の人生の全てが決まってしまったのかも知れない・・・

久美子は、大きな秘密を持ったまま、必死で自活し、普通の十八歳の女の子としての姿を装っていた。

他人が見る久美子は清純で、負けん気で、頑張り屋さんだと誰が見ても、そう思っていた。

何処にでもいる、十八歳の女の子として、仕事に、日常生活に、精一杯勤めていた。

けれど、久美子自身の秘密とは別に、久美子を悩ませていた事、必死で働き、節約して、ある程度の貯金がお金が出来ると、父親か、姉から、まるで、その時を待ちかねていたように、お金の必要事が出来てしまったから、助けて欲しいと言って来た！

「なんとか、お金を都合して欲しい！」

実家から、家族から、逃れたいと願っていても、どうにもならない、しがらみがつきまとう。

久美子はそのたびにほとんど、無一文になり、落胆して生きて行く気力さえなくなる、辛い事だった。

その事情とは、どうやら、父が不用意にする、借金が姉は苦勞して、尻拭いをしていたようだった。

そんな事も、一度や二度の事では済まなかった。

父は他人の痛みなどに気づく人間ではなかったから、姉が久美子に助けを求めて来る時は、よほどの事情が出来た時のようだった！

そんな時、久美子は大好きな絵の勉強をしたい気持ちも、希望も目標まで奪われたような、絶望した思いになり、しばらくは久美子は、家族の存在を憎んだ。

そして少しずつ、少しずつ、絵を描く事への情熱を無くして行った。

今、故郷として、この地に立ち戻り、六十五年の生きて来た歳月を強烈な想いと、途切れ、途切れに、ここで過ごした日々を思い出しながら、久美子自身の心に語りかけてみた。

「私の生きた日々は素晴らしかったのかと！」

もう、誰も、お参りする人のいない、寂しく、置き忘れられた、父と母、そして、不確かな事ではあるが生まれて数時間で亡くなったと聞かされている、たったひとりの兄？の眠る、この小さなお墓に、十数年ぶりに、久美子は手をあわせた。

そして子供の頃に大好きだった場所、穂高の山々が、遥か彼方に見える場所、幼い頃、よくひとりで、歩きまわり遊んですごした

『秘密の花園』

すでに、あの、風景は消えて無くなってしまったけれど、私の胸の中にはっきりとその場所があった。

私だけが知っている、あの美しい風景、今の時期は少し秋の色に染めて、久美子は、ゆっくりと歩きながらその風景を意識的に思い出し、ただ、久美子の中で、勝手にあの「秘密の花園」の風景は思い出としてあふれては消えて行った。

心の中で描く、少し早い秋は、やさしく、美しく、久美子をあの幼かった日々へいざなって行った！

大好きなリンドウの花が一面に咲き、広がっていく、風の波を幾重にも淡い秋色に染めて、美しい群青の世界が久美子を包み込んで行った。

現在も過去も私にとって、意味の無い、不吉な日でしかない事を忘れさせて、時間だけは等しく過ぎて行く。

故郷の風はやさしい

ゆっくりと走らせる車から

私の心を捉えた赤い実

太陽は秋の色に輝き

見知らぬ家のずずなりの柿の実

田んぼはこがね色をつよく彩る

しあわせな子供の笑い声が

姿を隠して聴こえた気がした

久美子の両親は、父が二十一歳、母が十七歳の時に結婚した、母の両親の家は裕福とは言えない生活だったようだけれど、母はひとり娘だった為に、家の跡つぎとして、遠い親戚であった、父の家との話し合いで、幼い時に、決まっていた久美子の両親の結婚だった。

父は男四人の兄弟の末っ子だった事もあり、甘やかされて、とても我儘な人間に育ったために、結婚してから母をととても困らせていたようだった。

久美子は幼くして、母を亡くしているのに、両親の結婚した頃や若い頃の生活は、ほとんどわからないし、誰もおしえてはくれなかった。

それでも、何かの噂話のように、父と母のことを、聞いた時は、幼かった私の好奇心をそそる、昔の御伽噺を聴くように興奮した。

子供心にも特別に興味を感じた事として、久美子の記憶に残っている。

両親は、結婚して、何年目かで、久美子の上の姉が生まれた、そして、次の年には久美子の下の子がうまれている。

たぶん、生れて直ぐに亡くなったと聞かされている、男の子は、私たち三姉妹の兄にあたる人なのだろう。

父は、結婚した頃に、当時、長野では、大手の運送会社に勤めていた。1930年前後の頃には、自分の会社をつくり、日本軍の軍属として、朝鮮半島にわたり、日本軍の備品を調達する会社を営み、結構な羽振りだったようで、久美子は、幼い頃に、父が酒によって、自慢げに話した事！

『内地の旦那さん』

『内地の奥さん』

と、朝鮮の人たちに呼ばれていて、いつも多くの朝鮮の人が手伝いに来てくれたのだと、言って、昔を懐かしそうに、何度も話すのを聞いた事があった！

私は1943年に朝鮮半島のどこかでうまれた！！！！

けれど、上の姉たちは日本で生まれたのか、朝鮮で生まれたのか、分からないまま、二人の姉は五十代の若さで、亡くなっている、若くして、久美子だけが、故郷を離れて、松本、東京と住まいや仕事を替えて、暮した事と、姉ふたりは、としごだったが、久美子は上の姉とは十歳、下の姉とは九歳も年齢が離れていた。

久美子が大人になってからは、ほとんど、姉たちとの会話もなく、滅多に、姉妹が親しく会う事

もなく、母が三十七歳で亡くなった事で、上の姉も、家を守るために、たった一度、見合いの席で会った人と、姉の意思など、関係なく、否応なしに、結婚させられた。

父は四十三歳の若さで、妻を亡くしてから、ず〜と、独り身で通したが、久美子の目で見ても、母に対しての気持ちでも、なんでもなく、ただ、ダメ人間であって、かっこつけた、言い方をすれば、世捨て人だ！

「いわる、生活破綻者だった！」

私は、朝鮮で生まれて、二歳三ヶ月で、日本に引き揚げて来た、もちろん、その頃の事など、私には、記憶にはないが、私は、小さい時には、とても体が弱くて病気ばかりしていた為に、とても痩せていて、姉たちは元気で遊び、結構太っていたような気がする。

だから、姉たちにあまり似ていないこともあり、父や親戚の大人たちに、時折、言われた事がある。

「おまえは、朝鮮から、拾ってきた子」

「引き揚げて来る時に、かわいくて」

「朝鮮の港で、小ちな赤ん坊が」

「弱弱しく、泣いていたから」

「かわいそうなので、拾って連れてきたんだ」

そんなふうな言葉で、言われて育った。

もちろん、大人たちの面白がる、冗談だと分かっているけど、久美子は、かなり大きくなる時期まで、この事が、とても気になる事だった。

そして、成長するにしたがって、元気な健康な体になり又、父の顔や性格に、姉たちより、私は特に父に良く似ているし、母や姉たちと同じところに、豆粒のような小さな赤い「アザ」があったりして、間違いなく、本当の両親で姉妹だと言う事を、久美子自身が、納得出来た事だった！本当の親子で、姉妹なのだと、久美子は、密かに、自分自身で安心した気持ちになれた。

(四)

父は若く、血気盛んな頃、朝鮮にいた時代は、お金に不自由のない生活して、たぶん、父の願う、思いどおりに希望する生活が叶えられた。

小さな会社の経営者として、人を動かし、人の上に立つ魅力を味わってしまった。
たとえ、小さな組織であっても、父を持ち上げて、へつらう人たちがいた！

朝鮮での暮らしや立場は、父を有頂天にして、愚かな甘い日常が、人としての本当の価値判断を狂わせた！

父の、その後も、甘い人生は日本に引き揚げて来ても続くものと思いがいしていた！叶わぬ夢をみ続けた一生だったのだろうか？

夢ばかり見る、生活破綻者としての怒りと弱い者への向けられる暴力にかわった、嫌われ者でしか生きられない、精神の弱い人間だったのかも知れない！

そんなふうに、思った時、この私は、性格など、父に一番似ていると思う、暴力など、振るわなけれど、精神の弱さや生き方の選び方が嫌になるほど良く似ている！

とりわけ、母はその父の暴力のはけ口になっていたようで、子供心に、父の存在は恐怖でしかなかった！

私の記憶の中で、今も体が硬くなるほどの怖い、化け物にしか、見えなかった、嫌な思い出だ！

日本に引き揚げて来る時、お金や何一つ価値のある物は持ち出せなかったとかで、ほとんど、身ひとつの、着の身、着のままの悲惨な状況での帰国だったようで、長野の父の故郷での生活は、幼かった私も、つねに空腹に耐える日常だった。

久美子は、ふと、幼かった日々を思い出しながら、あの出来事が否応なく、鮮やかにうかんでくる、まだ十六歳の私は、男性の事など、多少の興味がある程度であった頃！
それは突然の出会いで、始まった、それでいて、あまりにも大きくて

『衝撃的で、忘れられない出来事！』

久美子の家は、父が結婚した時に、父の実家から、渡された、山と少しばかりの田畑があったが、両親が朝鮮に渡っていた事で、それらの財産を、他の兄弟が、半ば強制的に横取りした状態になっていた。

元々、多くない財産を、長男が引き継ぎ、他の兄たちは、分家して、少しばかりの財産を分け与えられていたが、その誰もが、家族を養えるほどの物ではなかったから、分家した者は長男の家、すなわち実家の手伝いをして、何がしかの物を与えられて、やっと出来る生活だった。

だが、父は、その頃では珍しく、少しばかり、頭が良かったとかで、勉強も出来るからと、父の両親は、無理をして、旧制松本中学校へ通わせ、卒業させて、そして、長野の運送会社に父は勤めた。

その何年か後に、国の要請で、父は朝鮮半島に渡って行ったのだった。

久美子には、両親がどのくらいの歳月を朝鮮で暮したのかは、今となっては、知る事も出来ない。

けれど、終戦まじかの昭和二十年正月に、日本に引き揚げて来たが、父の故郷では、私たち家族は、歓迎されない人間たちだった！

父に与えられたはずの山や田畑は、どこにも無くなって消えていたのだった！

実の兄弟たちを信じていた父は、親から与えられた、わずかばかりの財産を兄たちは横取りしていて、一部は他人に売りわたして、お金の換えてしまい、もちろん、お金など残っていないから、父の手に渡される事もなく、父、そして、私たち家族は、引き揚げて、故郷に着いた、その日から、生活に困窮した！

父の兄弟であり、久美子には、伯父に当たる人たちには、私たち家族は、ただの、邪魔者でしかなかった。目障りなだけの弟の家族だった！

父は、なんとか、住む場所だけは、実家のある村はずれの小さな家を確保して、父は家族を辛うじて、守った。

歓迎されず、会いたくない「存在」であっても、血縁者である事は、その地域の人間であれば、誰でもが知っている為に、父は、兄の家族が住んでいる実家へ、時として呼ばれて、出向くが、その度にいつも、ひどい扱いを受けていたようだった。

もちろん、久美子自身は、その頃は、一番小さな自分がなぜ、父の実家へ、何かとお使いさせられるのかが、不思議で、子供ながらも！

「気が重い事だった！」

その頃は、父の両親は、すでに、代替りをしていて、なんの権限も無くしていたし、祖父は、久美子が余り覚えの無い時期に亡くなり、祖母だけが、隠居所に住んでいて、私は、祖母を良く尋ねて行った。

祖母はいつも優しく私を迎え入れてくれて、今、思えばあまり食べものがなかったにもかかわらず、わずかなお米やサツマイモなどを、伯父さんに隠れて、私に手渡して、くれていたようだった。

父の兄たちは、祖父が亡くなった事で、なおさら、父に譲られた、財産をかえす事も無く、そ知らぬ顔で、益々父は、兄弟の中で孤立した状態になって行った。生活の厳しさと、伯父たちの酷い仕打ちに、父は益々、母に対して、暴力をふるう、その姿は私たち姉妹の父に対する憎しみさえ、生まれていて、恐怖感だけが大きくなって行った。そんないびつな精神を持って、私は成長した日々だった。

父の苦悩

耐え忍ぶ母

幼き日に私が見た

生きる事の難しさを

今、思う

父と母の生きた日を

けれど、久美子には、とても大切な思い出があった。

私たち、三姉妹は、母が何度か、つくってくれた。

「特別な、お菓子を忘れる事が出来ない！」

「宝物の思い出がある」

とりわけ、食べ物は、強烈な印象を植え付ける。

子供の頃に口にした味は、忘れられない！

「特別に美味しいと記憶して残されていた！」

父は、時々、仕事をして、ほとんど、生活費を母に渡す事がなかった。

父がどんな仕事をしていたのか、どれほどのお金を稼いでいたか、久美子は父が働く姿をあまり見たことがないし、分からなかった。

けれど、父には何か、得意な事があったようで、時々、何処からか、仕事を頼まれる事があって、出かけて数日は帰宅しない日が、極まれにあった。

ただ、良く覚えてはいないけれど、幼い頃に、私たちが住む地域の村祭りの時、舞台の上で、うたを歌っている姿を見たことがある。

たくさんの人が拍手していた事！

周りにいた大人たちが、父を褒め称えていたような、かすかな記憶があった。

「父のいない日は、特別な日だった！」

そんな日は、母に甘えたくて、私たち姉妹は、駆け足で家にいる母のそばに急いで帰った。

姉たちは学校から、私は、外で、ひとりあそびをしても、姉たちの普通の日とはちがう事を感じ取って、母にすがりつくように、家に帰った、「かすかな記憶がある。」

そして、母と四人でおしゃべりが出来る事がなによりも特別に嬉しかった。

母は、あまり、普段はおしゃべりをする人ではなかったけれど、父がいない日は、私たちが母に、思いつく、すべての事をおねだりした。

何よりも、あの怖い父がいない事がうれしかった。

久美子や姉たちは

「父さんは、大嫌い！」「父さんは、帰ってこなければいいのに～」

たしか、そんな事を言ったように覚えている。

けれど、その時は、母にすごく、叱られた！

お父さんは、とても、とても、お仕事が大変なのだから、そんな事を言ったら、罰が当たりますよ！今は、怖いと思うかも知れないけれど、いつかきっと、お仕事が上手く行って、たくさんお金をいただいたら、

「あなたたちに、お土産を買って来てくれますよ！」

「でも、父がお土産を買ってきた事は無かった！」

父がお土産を持って帰ってきた、そんな、嬉しい思い出は無いけれど！

そんな記憶は久美子の中に一度も無かったけれど！

「いや、一度だけ、あった！」

私が幼かった頃、あの頃はまだ珍しい物だった。

「あんぱん！」

たった、ひとつだけ、持ち帰って来た、そのあんぱんを、お釜で、炊き立てのご飯の上に乗せてふわふわになった、

「ひとつのあんぱん！」

それを、母は嬉しそうに、私たち三人の娘にわけて食べさせてくれた。

「宝石のような思い出があった。」

母は、いつも、父にどなられて、殴られていても、こんなふうに、いつも父の味方をして、愚痴

ひとつ言わない事が、なぜなのか、久美子には、大人になるまで、不思議で、不満だった！

父の気持ちなど、分かろうとはしないし、わかりたくもない、父に味方する、母のそうした言葉が久美子にとっては、長い間寂しい気持ちを持ち続けていた。

けれど、たった数日、父のいない、のんびりと安らいだ気持ちでいられる事がただ、うれしかった!!!

(五)

けれど、極、わずかな、かぞえるほどの、特別な思い出だけれど、母が、私たちにつくってくれたお菓子がある。

「特別に、甘く、美味しかった、お菓子！」

それは、黒砂糖の塊に天ぷらの衣をつけて、油であげた物だ！

衣が、茶色になり、美味しそうに、ふんわりと膨らんできた時、取り出して、熱々を食べると、中の黒砂糖がとろ～り、とろけて、甘くてとても美味しかった。

黒砂糖の塊は、大きさが同じではないので、私たち姉妹は、競い合いながら大きい物を取り合った。

でも、母は叱る事もせず、ただ、にこにこことえがおで、私たちの姿をみていた。たくさんのお菓子をつくれるわけではなかった。

たぶん、あの頃は、黒砂糖も、貴重品だったはずだ、母は、どうやって、あの黒砂糖を手にいれたのか、わからないけれど、私たちは嬉しくて、特別な事だった。

母のおしえも母に伝えたい事も

あまりにも短すぎた時間

暖かな母のぬくもりにすぎる

時は意地悪なまでに母を遠ざけて

私から奪い去って行ってしまった

母は、松本の町育ちの人だった、幼い頃から、親同士の決めた相手として、母は、どんな思いで父と結婚したのか！

久美子には理解出来ない事だけれど、父や母の時代は不思議な事ではないのかも知れない。

「結婚する当人の意志よりも、親の考えが優先された。」

母は、父の故郷に来るまでは、おそらく、農作業などした事が無かったはずだ、それが、私たちを育てる為に、農繁期には、他人の家の仕事を頼まれて、どんな仕事でも、何でもして、手間賃を稼ぐ生活だった。

この地方では、田植えや稲刈りを、その地域の人たちが総出で、いっせいに行うのがつねだった。

母は、その人たちに混じって、言われるがままに、一生懸命に働いていた。

地域の人たちは、それぞれに、自分の田んぼや畑の作業を持ち回りで行う事で、手間賃を出さずに住む。私の家には、田畑が無いために、母は、わずかな手間賃やお米や野菜でもらい、それが、我が家の生活の糧、貴重な財源であった。

苦勞知らずで育った母だったが、父と結婚したばかりに朝鮮に行き、なれない外国暮らしをした

、そして日本に帰って来て、なれない農作業をして、子供を育てた。
そんな母の姿を見ている父は、少しも、母をねぎらうどころか、ともすれば、いためつけるようにさえ、幼い頃の久美子には見えていた。

相変わらず、仕事をせずに、父は寝転がりながら、本を読んでいる事が多かった。
時には電気代を払えずに、電気を止められて、ろうそくの灯りで生活していても、父は働こうともせずに、ぶらぶらと過ごしていて、母に文句や不満を言っただけは、困らせていた。
そんな、ろうそくのあかりでも、時には父は本を読んでいたりする。

「本の中には、いろんな良い事が書いてある！」
「お前たちも、本を読んで、面白い事を考えろ！」
「学校では、教えてくれない事も書いてあるぞ！」
私たちに言ったのか？母に対しての言い訳なのか！

父は思い出したように、こんな事を言ったりもした。
そして、極、たまに頼まれた仕事で出かけて行って、働いて得た、お金を、父は、ひと晩で遊び、使い切って帰って来る、そんな時の母は悲しそうに！
「泣いているように見えた時もあった。」

けれど、母は愚痴を言う事は無かった。
いつも穏やかで静かな母で、私たち姉妹は、よほどの悪い事やいたずらをしない限りは叱られる事も、叩かれる事も、母から受けたことが無かった。

ただ、他人に迷惑をかけたり、他人の物を黙って使ったり、取ったりした時や、嘘を言った時は、母は、いつもの母ではなかった。
ひどく叱り、そして、いつも母は、なぜ、その事が、いけない事なのか、私たちが分かるまで、許してはくれなかった。

だから、久美子は、その時から、悪い誘惑に迷いそうな時でも、たいていは、母のあの姿を思い、浮かべながら「善と悪」について、考える事が出来た。
母の言葉で、忘れられない言葉がある。

『貧乏は恥ずかしい事ではない！』
『誰かを恨んだり、憎んだりする事は、恥ずかしい事！』
『苦しい事は、神様がいつか助けてくださる！』

私たちに、そう言って、聞かせてくれた。

とても、きれい事過ぎるかも知れないが、久美子は母が言い残したこの言葉が、心の片すみにつもあつた。

母のこの言葉を守りたいとも思って生きて来た。母が亡くなった時、私は幼すぎて、たぶん、母が残してくれた、言葉や思い出のひとつ、ひとつを、美化しているのかもしれませんが、これらの言葉や思い出は久美子の寂しさを癒してくれた事は間違いの無い事実です。

けれど、私の中に住む、別の思いが「悪魔の囁き」として聴こえて来る！

「人生は短い、悔いの無い生き方をしたい！」

「好きなように生きていかなくては、嫌だ！」

「我慢ばかりの人生なんて、つまらない！」

「多少の我儘は、今の私の有益になる！」

「私は自由だ、誰にも束縛されたくない！」

どこか、虚栄して、狂想した感情は、別な人格の存在を疑いたくなる滑稽さで自分をみる。

ふと、そんな相反する矛盾な思いも又、心の片すみにあつた。

常に、自由気ままで、家族の事など、考える心を持ち合わせぬ父の血が、間違いなく、この私の中でうごめいていると感じる瞬間があつた。

久美子は、父を呪いたい思いで、確かな、親子関係を確かめていた。

今、人生の終りの時を迎えて、久美子は、そんな父の姿が懐かしくて、恋しくて、会いたいと、なぜか思う事もある、この頃だった。

呼び合う魂

満たされぬ親子の血

互いを避けようと

もがき苦しみながらも

わが父の存在

あまりにも自由

あまりにも破綻した人間

私の中で聴こえて来る

誰よりもそばにいる

近い父と私の存在

父は相変わらず、仕事もせずただ本を読んで暮らしては、突然いなくなったりする事が多くなった。

誰かに、何かを、頼まれたわけでもなく、家を空けることが多くなっていた。

村の人の父のうわさ話で、私は、はじめて知った言葉！

「放浪」

そんな言葉があることを知った、まだ、小学校に入学していなかったと思う、何歳頃の事だったか、あまりにも小さい時だったから、けれど、自分の父親の悪口なのだと、気づいて、言いようのない悲しい気持ちだった。

(六)

村の人の意地悪なつげ口、子供だから分かるまいと、まるで面白がるように、私に言って聞かせた。

「少しばかり、頭が良いからって！」

父の何を考えてんだが～」

「上の学校を卒業したからて～」

「わざと、難しい言葉つかって！」

「無学もんをばかにしてんだ～わ～」

「親切ごかしに、しゃべくって～」

私の父は昔から、なにを考えているか、分からない、人間なのだとか・・・

「放浪癖」

「又、あの罰当たりな男は！」

「馬鹿が出て来て、まったく困った奴だ！」

「おとなしい、お母ちゃんが気の毒だ～」

「子供もいるのにね、困った男だ！」

「色恋沙汰をおこすわけでもないのにね！」

「でも、どこで、何をしてるのか、わからないよ！」

久美子は、子供心にも、意味も分からずに、腹立たしくて、悔しくて、父が誰かに、なにをしたというのだろうと、とても悲しくて、いやな気持ちだったと思う。

お酒を飲むのが大好きだったようで、出かけて何日かして、家に帰って来る時に、父はお酒に酔っていた事も結構多かった。

いつもの事ではなかったけれど、酔っている時に、母に対して、暴力を振るったりする、そんな父の姿が久美子はとても嫌だったし、怖かった。

そんな父の生活態度を、母はいつも黙って、見送り、少ない手間仕事で、家族を支えていたが、
「ある年の稲刈りの頃！」

私は、母が働いている田んぼのあぜ道で、遊びながら、母の仕事が終わる時間まで、待っているのが、私の日常だった。

今、正直に言えば、子供の卑しきで、母のそばについていれば、なにか食べられる！

おやつを貰えるのが嬉しかった気もするし、なにより母と一緒に家に帰れることが私は嬉しか

った。

その日も、母と一緒に、何か、おやつを貰って食べていたのだと思う。

午後のお茶休みの時に、突然、母は気分が悪くなり、吐き出しながら、苦しがつた、とても、我慢強い、母のこんな姿を、私は見たことがなくて、うろたえて、泣きながら、母にすがった！

すこし、落ち着いた時に、仕事をやめて、近所のおばさんに支えられて、私と母は、家に帰ったが、その時も父は家にはいなかった。

私はどうする事も出来ずに、悲しさと不安で、「ただ、怖かった！」

なにか、とんでもない事が起きそうで、怖かった！

数日が過ぎた頃に、父は帰って来たが、母の寝ている姿を見ても、さほど、驚きもせずに、母の隣で、父も寝転んでいるだけだった。

実際のところは、私は、六歳くらいの子供だったし、父がどんな思いだったのかは、分からないが、病気で寝込んでいる母の隣で、ただ寝ている父の姿が、久美子をよけいに、父が憎らしく感じて、不安な気持ちにさせたように思った。

そのあとの事はあまり覚えてはいないけれど、しばらくして、母は病院へ入院した、その日から、何ヶ月か経ったある日、母は病院で亡くなり、家には帰ってこなかった。

上の姉は確か中学の三年だった、下の姉は中学の一年で、姉ふたりが交代で、病院にいる母のそばにいられる事が、久美子は、ただ羨ましかった。

父は、母が、入院してから、やっと仕事を始めた、父は、何処かの会社に勤めているのだと、姉がおしえてくれた。

だから、母が入院してからは、ほとんど家に父は帰ってこなかった。

姉たちも、交代で、病院へ行ってしまう、いつも私は、ひとりで過ごしていた。

「久美子は、寂しくても、がまんして！」

「一人で、留守番をするのだよ！」

上の姉は、そう言って、急に母の口真似をしているように、大人びた、口調で、久美子へいいおいて、いつも忙しがつて、出かけて行った。

久美子は、母に会えない寂しさと、自分を誰もかまってくれない事の不安と母に会いたい思いで、いっぱいになり、怖くて仕方なかった。

そんなある日、朝起きてても、誰もいない、久美子だけが家に置き去りにされたような気持ちで、

悲しくて、寂しくて、怖くて・・・

「ただ、母に会いたかった！」

隣町の病院に入院している母に会いたくて、久美子は、ひとりで、行こうと決めて、汽車に乗るためのお金を、家の中の引き出しを全部捜したけれど、汽車賃が足りるほどのお金はなかった。仕方なく、歩いていこうと、考えて、いつだったか、上の姉が、町の親戚に行くときに、久美子を連れて、歩いて町まで行った事があることを思いだし、あの道を、歩いて行けば、きっと、母のいる病院へ行けると、久美子は思った。

(七)

姉に連れられて行った、あの時は、それほど、遠いとは思わなかったし、町の親戚の家では、お祭りで出された、ご馳走をたくさん食べて、久美子は、大好きな「ぼたもち」をお腹いっぱい食べた事を覚えていた。

あの時、姉について歩いて行ったけれど、姉が常に久美子の手を握ってくれていた事とお祭りの事が楽しみで、何の不安もなかった。

ふたりで歌を歌いながら歩いた！

どんな歌だったかは、思い出せないけれど、久美子は誰かにおしえてもらった、覚えてたの流行歌を得意げに、歌いながら歩いた。

姉も一緒に歌ってくれた。

何度か、繰り返し、歌った頃に、町の親戚の家に着いたような気がしていた、だから、親戚の家まで行けば、きっと、母のいる病院はすぐ近くだと、勝手に決めていた。

朝起きて、ちゃぶ台の上に、サツマイモが一本置いてあったので、それを、かじりながら、久美子は歩き出した。

村の道で、誰か知った人にあつたら、きっと、何処へ行くのかを、聞かれると、子供ながらも、何か、いけないこと、悪い事をするような気持ちでいたので、誰にも見つからないように気を付けて、歩いた。

村から急いで山道を走るように、歩いたけれど、姉と歩いた道のはずが、見覚えのある景色は、何処まで行っても現われない！

広い大きな畑道になったり、木がいっぱい並んだ、少し暗い林が続いて、久美子の不安な、記憶にないけしきばかりだった。

小さな峠道を何度も越えて、なぜか、同じようなけしきが出てくる。

そんな時、久美子は、昔、ばあちゃんに聞いた、狐が化けて出て、綺麗なお花畑に誘いこむ事を思い出して、怖くなったが、家に戻る道も分からなくなっていた。

すると、本当に、お花が綺麗な場所が出て来た、きっと狐が久美子をばかしているんだと思い、走って通りぬけようとしても、なにかが追いかけて来るように思えた！

久美子は、怖さもあつたが、きっと、この山道を越したら、ぜったいに町に出られると、強く思い込んで、必死で歩いたが、山道は何処までも続いて、時々、名前も知らない綺麗な花がたくさん咲いているかと思ったら、突然、雪がふって来たように見えた、益々、久美子は混乱と怖さに

震えてしまった。

ふと、あのやさしい母の顔を思い浮かべては、母の顔の方へ必死で走り寄るが、そこには、母はいない！母の顔も消えてしまった！

そんな事を何度も繰り返して、どのくらいの時間が経ったのか、分からないまま、久美子はただ、山道をひたすら歩いた。

ある峠に着いた時、遙か遠いところに見える山並みが、うっすら白い雪景色で、夕陽なのか、朝日なのか、久美子にはもう、判断がつかないほど、今、自分が、何処を歩いているのかさえ、分からないけれど、今まで、見た事のない

『美しい景色だった』

久美子は、その美しさに、今までの悲しい気持ちや怖さを忘れてしまいそうな、ワクワクして、楽しい気分になっていた。

嬉しさと、心が悲しくなるほどの綺麗な山の景色だと感じた！

そして、光の線を幾重にも流れるように、眩しいほど、銀色に輝いて、山並みが揺れ動いていて、見ているすべての景色を照らしていると思った、瞬間に、暗闇が被い久美子をおそった。

「怖い思いだけが、久美子の体中を縛りつけた！」痛くて体が動かないほど、真っ暗やみになった。

もう、手も足も痛くて一步も足を動かさないほど、

「怖くなった！」

「体中がなにかにぐるぐる巻きにされているように！」

「痛くて、動けない！」

まるで、久美子のいる場所は、谷底だと思えるほど、何も見えなかった。久美子は、ただ、うずくまるしかない。

誰一人、久美子を助けてくれる人はいないのだ。

久美子はここで泣いては、化け物か、鬼が来て、食べられてしまうと、本気で、あの時は思った。

だから、声を出さずに静かにして、息もせずにいればきっと、化け物も、鬼も、暗闇で見つけることが出来ずに、諦めてくれるはずだと、勝手に決め付けて、我慢した。

やがて、息も出来ないほどの怖さと、疲れや不安で、久美子は気を失ったようで、久美子が気づいた時は、何処かの家に寝かされていた。

お坊さんらしき人が、久美子の顔を覗き込んでいた。
久美子の顔をじっと見ていた。
見知らぬ人は久美子をどうしようとしているのだろうか？

夢のつづきなのか、現実の事なのか、きっと、化けた狐の家に取り込まれたのだと思った！
「このままだと、化け物に食べられてしまう！」
本当に恐ろしかった！

久美子は、怖くて、眼をあけられずにいると、お坊さんらしい人が優しく声をかけてきた。
「お嬢ちゃんは、何処から来たのだい！」
「この辺では、見かけない子だけどね！」
「こんな夜中に、何処へ行くつもりなんだい！」
まさか、人さらいの悪い人に連れられて来たのかい！
お嬢ちゃん、ひとりなのかな？
そんなふうに分かれたように、覚えている！

久美子が答えられずにいると、次々と、聞いて来て、何をどう話せばよいのかが、分からずに、久美子は、ただ、じっとしたまま、怯えていた、はじめて見る、この家が、化け物屋敷なのだと
思い込んでいた！

しばらくして、誰だか？、久美子を知ってる人がいて、お坊さんに、久美子の事を話してくれた
ようだった。
やっと、久美子は、ほっとした気持ちになった。
「今夜は、ここで、ゆっくりと眠るんだよ！」

お坊さんが言った、明日、誰か、大人のひとに、頼んでお母ちゃんのいる病院に連れて行って
もらうからね！
「とてもやさしい口調で言った。」

久美子は少し、うとうとしたあと、もう我慢できずに、起きだして、ひとりで出かけようとした
時に、めったに会う事もなかった、父の兄である、伯父さんが迎えに来てくれた、急いで走る
ように伯父さんについて歩いて、久美子は、伯父さんと、母のいる病院に着いた。
母の病室に入った時、父は、ぼんやりと久美子を見て！
『母ちゃんはもう・・・』
そう言ったが、久美子には、父がなにを言っているのか、
『分からなかった！』
『理解出来なかった！』

病室には、ベットに寝たままの母と、そのそばについて、ぼんやりしている父がいるだけで、姉たちは何処へ行ったのだろうと、不思議に思った！

そのあとの事は何も覚えていない、ただ、普通ではない怖さで、どうしたらいいのか、『母の声が聴こえない、母のそばに行きたい！』

大変な事が起きていると思いながらも、母のそばに行きたいだけだった。

幼かった私は、そのあとの事は何もおぼえていないし、わからなかった。

「母の最期の姿を何ひとつ覚えていない！」

母が亡くなった事を理解出来たのは、ずっと、ずっと、後のこと、私には長い時間が必要だった！

母は、何一つ、良い事もなく、楽しい事もなく、幸せだった事も無く！

「三十七歳の若さで、亡くなった！」

「十七歳で結婚して、初めての子供は生まれて直ぐになくなった、その後、立て続けに、姉ふたりを生んで、何年か後には私を生んでくれたが、なれぬ外国暮らしをして、やっとの思いで、日本に引き揚げて来ても、生活破綻者の夫に、何ひとつ文句も言わず、従い、そして、暴力に耐えた。

母は、あまりにも幸せの薄い人生だったと、久美子は、ずーと思っていた。

けれど、幼かったあの頃には、わからなかった、母の気持ちを久美子は、成人してから、少し、母の想いや、何が幸せで、人生や、幸福とは、いろんなかたちがあり、他人には、はかり知れない事なのだと思う。

母の短い人生にも、ほんのわずかな、小さな幸せを感じた時期があったのだろうと、思ったりもする。

「久美子も、又、誰にも理解せれぬ愛を生き抜く！」

(八)

母が亡くなって、数年は、父も、人並みに、残された家族を守り、働いて、お金を得るようになった。

けれど、上の姉が、母が亡くなった後は、私や、家族の母代わりになって世話をしてくれて、母が亡くなった時、上の姉、ミキは、十六歳、下の姉、鈴子、は十五歳だった。

そして私は、良く覚えていないけれど、たぶん、六歳か七歳だった。

姉ミキが二十歳になった時、突然、結婚して、姉のお婿さんである、義理の兄が出来た。

そして、その頃には、姉、鈴子は松本に出て、就職していた。

だから、父は、又、元の生活破綻者に戻っていた。家を預かる、義理の兄がいて、姉がいて、何の心配もないと考えた父は、以前にも増して、ダメな人間になっていた。

母のいない寂しさが、なお、無能な人間にして行った。

時には、ひと月も家に帰らず、何処で、なにをしているのかもわからぬ、放浪して歩く人間になっていた。

父がどんな人間であれ、義兄は、働き者で、姉はその点だけでも、幸せだった、私は、性格的に、父と似たところがあり、特に母が亡くなってからは、とても気むずかしい子供になったようで、姉を困らせていたようだった。

学校が大嫌いで、行きたがらず、手を焼いていたと、大きくなってから話してくれた。

特に体が弱い、よく熱を出し、お腹も壊しては、食べ物も贅沢をいった、好き嫌いの激しい子供だったようだ！

その頃は、どこの家庭でも、肉よりは魚をよく食べた。

それも、川魚が主だったから、私は、あの魚の生ぐさい臭いがとても嫌いだった。

その頃の贅沢品は、缶詰だった、肉を甘辛く煮たものが好きだった。

私はその缶詰を、お腹を壊すと、決まって、

「肉の煮たのを食べたい！」

そう言って、義兄の仕事帰りに買ってきてもらう事が、決まりのようになっていた。

今思えば、牛肉ではなく、鯨の赤身だったようだが、その頃では、贅沢な食べ物で、特に、田舎での事、義兄が町に出て、働いていたから、出来た事だった。

義兄は、とても、人間的に出来た人だった。

私たち家族を大事にしてくれた。

姉夫婦に結婚二年目で、男の子が生まれた、その日の出来事は、私には、忘れる事が出来ない事だ

。子供を生む事も、お産も、あの頃は、家で済ます事だったから、狭い、田舎での事、お産婆さんもない村！

姉は子供が生れるその日まで、良く働き、家事もこなしていた。
父は、相変わらず、何処かへ行っていないし、義兄は仕事で留守だった。
姉の陣痛が始まった時には、私と姉だけしか、家にはいなかった。

だから、急に、姉が苦しみだして、私はどうすれば良いのか、ただ、心配するしかなくて、慌てていると、姉は苦しみながら、隣村にいるお産婆さんを、急いで呼んできてと、私に言い、伝える事がやっとだと思えるほど、苦しそうだった。

私は、姉が言うままに、お産婆さんを呼びに行って、お産婆さんと一緒に戻ると、姉はもう、赤ちゃんを一人で生んでいた。
しわくちな、血まみれの中で、赤ちゃんは、大きな声で泣いていた。
もう少し、お産婆さんがおそかったら、どうなっていたのだろうか、あの時の驚きを思い出すと胸の鼓動が激しくなる緊張した思いになる！

生れた赤ちゃんは、可愛くて、私はとても嬉しかった。
姉夫婦も子供と私とを分け隔てしないように、気をつけていたようだったが、なぜか、私は気持ちの何処かで、寂しいような、姉を取られたような、不安定な感情だったかもしれない。
「その後、赤ちゃんは元気に育つはずだった！」
けれど、誰もが、信じたくない、不幸が起きた！

赤ちゃんが、まだ、小さくて、幼かった頃に、突然の病気で亡くなった。

私には、どういう事だったのか、わからないけれど！
私の日常は、それを境に、大きく変わった、学校へ行きたくない、などと、姉を困らせる事も出来ないし、姉が許してはくれなかったたぶん、子供心に、私は姉の辛さを知ったのだろうか？

家族の中では、なにも変わらないように見えていたが、久美子の居場所が無いような、ぎこちない、息苦しさを感じていた。
姉は、益々、仕事をたくさんして、家事もきちんとかこなしていた、私たちの母がしてきたように、田んぼや畑の手間仕事だったが、姉も、本当に良く働いた、だから、我が家は、母がお金で苦勞したのとは比べられないほど、生活は豊かだった。
少なくとも、食べ物が無くてひもじい思いはしないで、暮せていた。

おかげさまで、私は、義兄と姉の稼ぎで、成長して、県立高校にも通わせてもらっていた。
そんな時に、ある日、突然、父は、今まであったことも無い男性と、その人の息子を連れて帰ってきた！

父の説明だと、今まで、行方不明だった、父の腹違いの弟だそうで、歳は三十代で、その息子が六歳だと言う事だった。

祖父も、とても変わった人だったようで、若い女の人に生ませて、祖父が亡くなるまでは、何かしかのお金を送っていたのだと言って、父は、なぜか、自慢げに話している事が、久美子には不思議だった。

その頃は、すでに、祖父も祖母も亡くなり、伯父たちは、そんな事など知らないとして、兄弟として、認めようとせず、付き合いもなかった。

ところが、どんないきさつで、父は、歳の離れた、腹違いの弟を見つけて、心を通わせたのか、私たち家族も、伯父たちにも、理解出来ない事だったが、むげに追い返すことも出来ないと言って、心優しい義兄が、この家で一緒に住んで、生活の基盤を立てる事はどうかと、提案してくれた。

この事が、私の運命が大きく変わっていく出会い！

『この伯父と私は！』

この時、お互いの心にどんな力で、つながっていたのだろうか！

(九)

突然現われた、伯父と、私たち家族は一緒に住むようになった。

そして、あの日、伯父たちと一緒に住むようになって、何年目かの出来事！

私には、まるで、天と地が逆になってしまったような、思いもよらぬ出来事だった！私の伯父！

「その人の名前は、春馬といい！」

「歳は三十三歳だ！」

定職を持たない、日本画の絵描き！

だが、映画の看板描きが今は、食べる為の仕事だ！

元々は、日本画を描く事が、希望だったが、日本画を描いて、食べて行けるか、どうかの才能を、久美子には、判断の出来る事ではなかった、映画の看板描く仕事のない時は、自分が描きたい絵を描いて過ごす事が、いつもの事だ。

そしてこの伯父の一人息子の匠は、久美子を姉のように慕っていた。

確かなことではないが、匠は、久美子に母の面影を抱いていたのかも知れない。

私は、姉夫婦の保護のもとで、どちらかと言えば、年齢よりも幼いところのある人間だった、勝手にそんなふうに思っていた。

はじめて春馬に逢った時から、久美子は、心ひかれるものを感じていた。

他の伯父たちとはちがう親しみを感じて、伯父として、身近な感覚を持ち、接する気持ちがあった。

だから、伯父の春馬の求めに応じて、絵のモデルをする事になんの躊躇することなく応じていた。

どちらかと言えば、久美子自身も、楽しく、心はずむ事だった、そんなふたりの心が通じて、久美子は、春馬の求めで、モデルを度々務めていた。

久美子自身も、油絵を描く事に喜びを感じ始めていた時期でもあり、伯父の春馬とは芸術的感性とでも言おうか、いろんな面で通じ合う事が多かった。

そんな日々の中で、ふたりの間で、言葉には出来ない感情がある事を、ふたりは気づき始めていた！

けれど、伯父と姪の関係は、永遠にかえることの出来ない事だ！

お互いの絵を語り合う事が、楽しくて、久美子にも、春馬にも、最高の喜びでもあった！

お互いの微妙な心押し隠して揺れ動く感情であっても変わる事のない、ふたりの関係は

『伯父と姪』

危ういほど、異性としての心を、ふたりは耐えるしかない日々を送っていた。

「苦しさや辛さの中で！」

互いに気づかぬふりをして、言葉に出来ぬ想い！

その日は、久美子と春馬だけが、家にいて、ふたりで、絵を描きながら楽しい時間を過ごしていた、そして、二人はどちらともなく、いつの間にか、あまりにも、自然に、寄り添い

『体が一瞬、触れあい！』

『唇を交わしてしまった！』

『ふたりの鼓動はいつしか、ひとつに響きあった！』

そのあと、ふたりは、まるで、何かに導かれるように、越えてはいけない、

『禁断の愛の壁』

『禁線を越えてしまった！』

久美子は、この時が、接吻も肉体の契りも、初めての体験だった！

けれど、春馬にも、久美子にも、このような関係になる事は、決して許されない相手！

「伯父と姪」

どんなに、変えようとしても、変わらぬ関係の相手を、ふたりは愛してしまった！

春馬は、久美子に、許しをこいながら、激しく自分を責め、どうする事も出来ない、苦しみに涙が流れた。

若く、大きな未来のある、これからの人生で久美子はどんな素敵な恋愛でも出来る、素晴らしい青春の日々が待っている久美子を・・・

春馬は、一時の感情に負けてしまった自分の情けなさや、久美子へのすまなさに、身震いするほど、自分に嫌気がした。

けれど、久美子の心は、決して後悔はしていなかった。むしろ、あの、ふたりの鼓動の響きあった時、久美子の体の全てが熱く、そして、感情は喜びの音楽を奏でるように、軽やかに波打つ心の言葉にひとすじの喜びの涙が流れた。

久美子にとっては、素敵で大切な体験が出来た事が嬉しくて、思わず、心が震え、躍るような気持ちだった！

「春馬は言った」

ただ一度の、ふたりの喜びとして、心の奥深くしまっておこうと・・・
だが、久美子は、忘れることなど出来る事ではなかった！
『久美子の十七歳のおわりの素晴らしい体験！』

春まだ浅い頃の出来事だった。
その後の春馬の描く絵は、素晴らしい輝きと気品ある、艶やかさをかもし出していた。
そして、春馬の描いた絵が、日本画展にて、好評を得た時期でもあった！
久美子は、心待ちにしていた、高校を卒業した。
それと同時に、松本に出て、就職した。

住まいも、松本に、小さなアパートを借りてひとり暮らしをはじめた。
けれど、ほとんど、同じ頃に、春馬も、日本画壇での評価も上がり、絵も少しずつだが、売れはじめた事で、春馬も又、同じ頃、松本にひとり住まいをはじめていた。
息子を、久美子の実家に預けたままの新生活だった。

日本画を描きながら、だが、たまには、映画の看板も描かなくては、生活が成り立たない貧しさだった。
だが、ふたりは、逢う事を避けていた。
久美子は、春馬に逢いたかった！
ただ、春馬の声が聴きたい！

ただ、久美子が描いた絵を春馬に観て欲しかった。
そんな思いを募らせながらも、ふたりは頑固なまでに、逢う事を避けなくてはいけなかった！

春馬も久美子もお互いの心情がわかりすぎるほどで、狂おしいほど思いあっていた、お互いの様子が知りたいと願っていた。
ただ、元気でいてくれる事だけを知りたくて、声が聴けただけでふたりは嬉しかった。
極、たまに、電話で連絡しても、話す事は、お互いの体の心配事であって、お互いが、本当の想いを言葉に出す事は出来なかった。

(十)

春馬と久美子は、お互いの気持ちを押し殺して、生きていた。

春馬は、久美子への愛おしさから、気持ちを抑えることが出来ずに、華麗高原へのスケッチの旅に、久美子を誘ってしまった。

久美子は、その言葉をただ、ひたすら、待ち続けていた。

「春馬の抑えきれない久美子への想い！」

姪としての久美子を愛する対象として、みてはいけないと、心から打ち消す努力をすればするほど、春馬は行き場のない感情に押しつぶされそうになる。

どうすることも出来ない感情と想いがひとり歩きして、春馬を苦しめていた。

久美子もやはり同じように自分の混乱する想いと戦いながら、久美子の若い体は、一途な心とは正反対に不安定さで、時には、何もかも、めちゃくちゃな行動をしたくなる。

春馬と久美子の約束の日をふたりは指折り数えて待つ、そんな可笑しさがあつた。

久美子は嬉しさのあまり、春馬とやっと逢えたのに、話す言葉が見つからない！

焦る想いだけが、ふたりはなんとなく気恥ずかしく、お互いを控え目に微笑むように、見つめあつた。

高原へのタクシーを奮発して、少しの時間も惜しむようにふたりは遠慮がちにみつめあい、歩いた高原の風が涼しげに、草花を揺らしていた。

逢えない苦しみに耐えてきた、この数ヶ月は、なにを見ても、お互いの穏やかに過ごせて欲しいと願う事ばかりだった。

それは、お互いを心配して、共に切ない感情と胸が高鳴り、今この時間だけは幸せな関係で居ようと話した。

約束の日まで、久美子は、待ちどうしくて、なんだか急に、時間がゆっくりと過ぎて行くように思っていたが、今やっと、会うことが出来た、春馬の隣にいられる事が嬉しくて、幸せだった。

たとえ、どんな結末が待っていようとも、もう、ふたりにはとめようのない心が結び合う、春馬と久美子の！

「情愛」であり「純愛」だった。

春まだ浅い、高原は、ほとんど人のいない静けさ！

鳥の声さえも聞くこともない、まだ、長い冬からのめざめはこの自然を閉じ込めているように、ふたりには、心地よい場所だった。

ふたりは、あまり、話すこともなく、むしろ、ふたりが話しあう声は自然に対しての礼儀に背く

事のように思えて来た。

どちらかともなく、手をつなぎあい、この自然の美しさにみちびかれるようにふたりは抱擁した。

そして、この風景に溶け込んだ、仲の良い普通の恋人同士のように、より添いながら歩いた。広い高原は、誰か、他人に出会うこともなく、ふたりは、森の魂にみちびかれて、森の中へ入って行く。

丈の短いササが巨木と巨木の周り一面に広がる、柔らかな春の陽が暖かく樹木の間をぬって射して、ふたりが歩く、その場所だけがまるで、大自然の陽光のスポットライトの光を受けているように別世界が広がる、光の道を歩くように！

ふたりは、どちらからともなく、柔らかな草原の大きな木の陰に腰を下ろして、森の香りにつつまれて休んだ。

静かな森が、久美子の緊張した喜びに、あらく苦しそうな呼吸の乱れまでも春馬には聴こえていた。

でも、どんなに、愛し合っている、ふたりの関係は、伯父であり、姪の関係、ふたり、密やかに逢う事を誰にも知られてはいけない！

春馬も、久美子も、お互いの名を呼ぶ事はしない・・・

今、おかれている現実を、思い出したくはない！

あくまでも、恋人同士の間柄でいて、今、この瞬間だけでも、心通じ合わせられる、ふたりでいたかった。

禁じられた愛にふるえて

寄り添いながら歩く

ふたりを森の精が包み隠す

ふたりには、今、さほど、興味の持てない、お互いが観た最近の映画の事などをあえて話しては、感情の高まりを抑える努力をして、今のふたりには意味のない話を続けることの可笑しさも笑う事など出来ない。

けれど、久美子の若き肉体は、はちきれんばかりに、ピンク色に染めて、若い肌がとても美しく、春馬は、無意識のうちに、久美子にそっと触れた。

そんな行動を春馬自身が抑えられない、いらだちと共に、久美子への愛しさが、熱情へと変わって行く。

そっと触れた春馬の手のぬくもりを感じた久美子も又、愛する春馬に、触れられている事で、久美子自身の感情と、体中の血潮が、熱く流れて、早鐘のような激しい鼓動が苦しいほど、久美子は幸せな想いと、興奮した感情は、何ものにも変えがたい最高の喜びを感じていた！

森の奥深く、ふたりだけの世界はまるで、森の精霊に守られて、導かれるように、二度目の禁断の壁をこえた、けれど、そのふたりの姿は、この深い森の風景に溶け込んでいて、違和感を感じる事の無い、大自然につつまれた春の風がやさしく流れていた。

ふたりにはもう、後悔も、罪悪感もない、一瞬の幸せをもとめた、熱い想いがあった。だが、その感情はふたりが深く傷つく事でもあった！

喜びと、歓喜にみちた感情の何処かに、どうする事も出来ない不安と絶望が、見え隠れしている。

ふたりは、帰りの車の中で、ほとんど、言葉を交わさずに、悲しい気持ちの別れになった。けれど、ふたりの心は、愛しさで胸がはりさけそうになり、男と女であるこの姿が、恨めしく、切ない想いが、胸を締め付けていた。

(十一)

久美子は、春馬との旅から帰っても、あの日の、あの喜びに満ちた、久美子には、これまでに経験の無い、幸福感とでも表現すればよいのか、一瞬、一瞬が、時折、久美子の意志とは、関係なく、肉体と感情の働きが、突然、思い出しては、気恥ずかしさと体が熱くなる自分に戸惑っていた。

久美子の若き肉体はもう消しようのない、人間として、女性としての、必要不可欠な事として、大人の女の肉体に変わっていた。

大切な記憶として心と体に刻み込まれた。

清らかな心を持ちながら、春馬との消す事の出来ない！

『久美子は生涯忘れられない、大切な記憶として！』

『胸の奥深く、刻み、抱きしめた想い！』

久美子も、春馬も、決して、長く続けられる関係ではない事だと、充分に承知していた。

けれど、ふたりの心が深く通いあい、絆が深くなれば、なるほど、苦しみが増す現実がある。

久美子は何も考えず、仕事に打ち込む事で、春馬の面影を打ち消して現実の苦しみに耐えていた。

春馬も又、現実の罪意識から逃避するような思いで、絵を描く事に没頭していた。

時には、そぐわない、馬鹿げた行動をとる事で、その場しのぎの憂鬱な感情をつくり、耽美な思いに浸っては、許しがたい、醜い生き物になった、あい入れられない、自分への憤りを募らせていた。

ふたりはぎりぎりの苦しい感情に耐えながら、

「お互いに連絡を取る事は出来ない！」

もうこれ以上の醜い欲情に負けた、自分の心を見せたくなかった。

数ヶ月が過ぎた頃、久美子の元へ、懐かしい文字の手紙が届いた。

久美子は、手紙をすぐには開けずに、耐えた、春馬の匂いを感じる事が罪深い事を繰り返すように、久美子をたじろがせた。

けれど、耐えられずに春馬からの手紙をあけた。

その手紙には、ただ一言！

「秋景色を観に行こう、待っているよ！」

そして、逢いたい日付と逢う場所を箇条書きされた、まるで、何かの仕事の連絡のような、ただ

、無機質に文字が並べられていた。

それは、春馬の、久美子への想いの深さを隠した、精一杯の苦しみの姿が、久美子には、痛いほど、胸にせまる、春馬の深い愛情を感じた。

愛しき人は
互いに心を隠して
冬が来る前に
急ぎ足で触れてゆく
消しようのない記憶を
あふれる想いと
彩られる微笑
神さえも許さぬ
罪深きふたりの愛

今年の残暑は厳しくて、九月も、もう直ぐに終わるというのに、夏のような暑さがつづいていて、何処となく、疲れがたまっているようで、久美子は、夏にひいた風邪が治らずに、気分がすぐれない日々だった。

久美子は春馬への想いと罪意識に、悩みながらも、耐えがたい感情の不自由さで胸が痛い！
十月を迎えても、気ばかりが急いで、春馬からの誘いの日を迎えた。
久美子は体調が良くないままで、春馬との約束の場所へ急ぎ足で歩く！

ふたりは逢えた嬉しさと、どこか気恥ずかしさが混在するぎこちない笑顔で、言葉もなく近づいた。

春馬は、何処へ行くとも言わずに、小糸線に乗り込んで、ふたりは時々微笑みあい、眼差しで話し、言葉を交わさずとも、心で語り合っていた。

小糸線の終着駅、糸魚川で、ふたりは下車し、久美子は、春馬のこれからの予定を何一つ話すこともしない事を少しだけ、不安になったが、あえてその気持ちを打ち消して、何も尋ねなかった。

ふたりは初秋の海を眺めながら、お互いの描く絵の事を少しだけ話し、互いに海の風景をスケッチして過ごした。

久美子は、思わず、春馬に言った。

渾身の想いをこめて・・・

「今、描いてる私の絵を見て欲しいの！」

「一度だけでいいから、私の部屋に来て！」

けれど、春馬は、うなずいただけで、言葉では、返事をしなかった。

今、こうして、ふたりであっている事さえ、ふたりを知るものに見られたら、その瞬間から、ふたりは、地獄の苦しみを味わう事がふたりは、承知している。

久美子の育った、山里では、ふたりの関係を知る者はいないはず、久美子はともかく、春馬を、いまだに、久美子の実家のある村では、

「うさんくさい人物、信用できない人間だ！」

として、見る者も多かった！

久美子の父の兄弟は、誰一人として、「春馬」を、兄弟で身内だとは、認めてはいないし、ましてや家族だとして認めて、受入れられることはなかった。

ただ、風変わりで、偏屈な、久美子の父だけは、本心は分からないが、元々この地の人たちは、父を変わり者として、あまり信じられていない者同士の付き合いだと、面白半分に、気まぐれで、兄弟として自分の家においでいるのだろうと、思われて、噂話として、人から人へと囁かれていた。

だが、春馬は、久美子が松本に就職して、ひとり暮らしをはじめた、同じ頃に、やはり、息子を久美子の実家に残して、突然、松本で仕事が見つかったと言って、久美子の実家を出て来ていた。

久美子の家族が、何か、いづらくしているわけではないが、特に歓迎もしない、眼に見えない気まずさをいつも、春馬は感じていた。

ふたりが寄り添う影だけが美しくて

ひとの眼にさらせぬふかい愛を隠して

春馬の息子は、おそらくは、生れて、すぐから、このような環境で成長していたのだろう。

おとなしい子で、常に一人遊びをしていた。

いちおう、学校へも通っていたが、境遇が、そうさせている事であって、彼自身が、自ら好んで選ぶ人生ではなくても、その日常は悲惨だった。

ほとんどの子供が、彼を無視し、軽蔑して仲間はずれにしていた。

時には、こんなふうに、ののしられて・・・

「お前は汚い！」

「どこから、生れた、木の股から～～～」

「親なしっ子の根無し子！」

本当に子供は残酷なものだ！

おそらくは、大人たちの心ない、噂話を、子供は、素早い好奇心で面白がり、戯れる！
子供らしい、気まぐれな行動と誠実な心を持ち合わせて、悪戯と遊びのひとつなのだ！
子供の心は時に、まるで悪魔の囁きのように、弱い者をいたぶる事がある！

子供とは、どんな大切な事よりも、このような、大人からみればどうでも良い事を、好んで、簡単に学習してしまう。

久美子は、春馬から、息子の母親の事を一度も聞いた事がなかった。

又、あえて、久美子も、その事に触れてはいけないような気がしていた。

春馬自身も、どんな事情があつての事なのか決して、匠の母親の事は話そうとはしなかった。

(十二)

糸魚川の海を眺めながら、ふたりはそれぞれに、スケッチを思いのまま楽しみ、時には、お互いの存在を確かめ合いながら、微笑みかけて、安心しながら、時々、じゃれあうように、描いたスケッチを批評しあいながら、観ていた、誰にも邪魔されない穏やかな時が過ぎて行った。

知った人に出会う事を極力さけて、糸魚川の街から少し離れた場所にある、宿にふたりは泊まった。

年齢より若く幼な顔に見える春馬であっても、恋人同士には、なんとなく不釣り合いな感じがする、又、親子として見るには、無理があるし、かと言って、不倫の関係のにおいなど、全く感じさせない！

どこか、清潔感のする、不思議なふたりの姿を、宿の者たちは、誰もがこころよい感情で、迎えていた。

食事のあと、ふたりは、部屋中に、今日ふたりが描いた、スケッチを並べて観ていた。あまり、はしゃぐ事もなく、静かに、並んで座り、一枚、一枚のスケッチを、大切に観て、それぞれのバックの中にしまいおさめた。

久美子は、春馬のスケッチの一枚を自分の物と、取り替えて欲しいと頼みたかった！その願い事を言葉にしたかったけれど、切ない感情を必死でこらえて、言葉を飲み込んだ。ふたりの愛を知られるきっかけを残す事は出来ない！

おそらくは、春馬も、同じ気持ちなのだ、久美子は感じて、切なさや悲しみが身体中に走って、こらえきれない感情の高まりと情熱で思わず、大胆に、久美子の方から、春馬の唇をからだごと求めて行った！

それは、今までの久美子の控え目な姿からは、ありえない大胆な行動だった！

ふたりは、何度も、何度も、接吻をして、抱擁して！

『三度目の禁断の契りを交わした！』

真夜中の海を、少しだけ、窓を開けて、久美子は、今もまだ、体が熱い、ほんの少しだけ開けた窓のすきまから、冷たい風が、久美子の熱い体を冷えさせて行く・・・

久美子は、体が冷えていくごとに、悲しみが深くなって行き、声を出さずに泣いた。頬をつたう涙は幾重にも流れて、着ている浴衣を濡らしても、久美子は、じっと耐えるしかなかった。

その姿を、春馬は、眼を閉じたままで、すべてを知り、感じ取っていた。

春馬もまた、眠れない夜だった。

春馬は、久美子に伝えてはいないが、もう、これ以上、久美子に逢うことが出来ない！
逢って罪を重ねてはダメなのだ！

愛し合ってはいけない者同士がこのままの関係を続けていたら、どんな結末が待っているか、理性では充分わかっている、ふたりは逢ってしまうと
「心と理性を失う！」

ただの男と女になってしまう自分の心のおそろしさを、春馬は深い罪として受け止めていた。
進むべき道を誤って、感情が浮遊する！
おぞましい自分の肉体を抑えられない事が恨めしかった！

これ以上、久美子に、悲しみや苦しみを、与えてはいけない事だと、春馬は、硬く心に決めてこの旅であった。
もうこれ以上、互いに傷つけあってはいけない事なのだ。
春馬は、糸魚川の駅で、久美子に言った。

「私はこれから、行くところがある！」
「ここで別れよう！」
「君は、ひとりで帰れるね！」
「気をつけて、帰ってくれ！」
「それから、お願いがあるんだ！」
「東京に出て、大学で、勉強してくれないか！」
「やりたい事を、勉強してくれ！」

春馬は、それだけを言って、久美子に意識的に冷たく背を向けて、急ぎ足で、去って行った。

久美子は、松本に帰って、数日がすぎたある日、春馬から、手紙が届いた。
手紙は、さも愛想のない、事務的な書き方で、久美子にストレートに伝わるように書かれていた。
。

「もう、これ以上、私を求めずに！」
「君の人生を生きて行ってくれ！」
「もう、苦しむ事も、悲しむ事もない！」
「私の存在を消した、生き方をしてくれ！」
「私はもう、決して、君を求めない！」
「もう二度と、君に逢う事も無い！」
「お互い、思い出など、つくっては、ダメだ！」
「私は、もう、君を愛さない！」

「どうか、私を忘れてくれ！」
これだけが書かれた、手紙だった。

春馬が、糸魚川で、別れる時に言った言葉・・・
「東京へ行き、勉強してくれと！」
「いったい、何を、学ばばよいのか・・・」

久美子は、今は、なにも考えられなかった。
ただ、無気力な日々・・・
こうなる事は、久美子もわかっていたはず！

覚悟は出来ていたはずだったが、現実には、久美子は、春馬との別れは、耐え難い苦しみ、あまりにも、辛すぎた。
春馬からは、あの手紙一通が送られてきただけで、その後、ぷつぷつと連絡がなく、居場所さえわからないまままるで、久美子との関わりを消し去るように、春馬は消えてしまった。
久美子は連絡の取りようもなかった！

伯父と姪の、命がけの恋愛は、どんなに願い、祈っても結末は悲劇で、悲惨だ。
糸魚川でのあの日から、三ヶ月が過ぎた。
久美子は、新たなる運命を、喜ばずに、思い悩んでいた。
二十歳を過ぎたばかりの久美子に、新たなる命が！

久美子のお腹には、伯父である『春馬』の最高のプレゼントであるはずの！
『小さな命が息づいていた！』

禁じられた愛を懺悔して放浪する魂
愛するひとの新たなる運命も知らず
遥か遠く彷徨いびとの心とからだにきざむ
深すぎる傷の痛みは逃避する場所もない
紺碧の海の色は美しき愛を語るひとを映す

(十三)

久美子は、お腹の子をととても中絶など出来ない！

とにかく、子供を生む事にして、出来るだけ、世間に知られずに、久美子の家族には特に、知られてはいけない事だった！

春馬にも、もちろん知られずに最大限の注意をして、産み月まで、隠れるような密やかな暮らしだった、久美子は、正直に言えば、全く、子供を身ごもるとは、思ってもいなかった。こんなふうになってしまうほど、久美子の心は幼かったのだろう、自分には人の親になる資格のない人間だと、思いながらも、久美子には、まだ何の感覚も無い！

「命の存在」

を無視する事など、とても出来ないし、勇気もなかった。

そんな日々が数ヶ月過ぎて行き、ある日、突然、なにか途轍もない力で、久美子に伝わる感覚！すこし、お腹にお肉がついて、太ったのかしらと、感じている時だった。

久美子の体の中で、

「命の存在を感じた！」

「はじめて自覚出来た瞬間だった！」

久美子の心の中で、母に伝えたい、切なくて、悲しくて、表現の出来ない特別な感情がして、久美子はひとりで泣きながら、不安と喜びの涙が流れた。

その日から、久美子は、もう、迷う事無く、子供が生れて来る準備をどうすれば良いか真剣に考えた。

時には、命の存在に励まされる思いがするほど、久美子の中で息づく命！

その動きは、どんな苦しみより、悲しみを伴いながらも愛おしさが募る感覚で、久美子に訴えているように、思えることだった！

久美子はそんな時、誰に教わった事でもないが、自然な気持ちで、その命の存在に話しかけていた！

『ごめんなさいね、あなたをこんな想いにさせて！』

『悪いお母さんだけれど、あなたを待っていたの！』

『元気で、逢いに来てください！』

そんなふうに語りかけていた。

久美子は、この命の存在は

『神からのお預かりした存在！』

『神は誰かの為にこの命を久美子に託したのだと！』

そんなふうに思える感情であって、とても正直な気持ちで神から託された「存在」を信じられた

。久美子自身から伝わり来る「存在」の愛を感じて、そう思う事で正当化して自分に言い聞かせて納得出来た。

久美子は犯した罪からの逃避としての言いわけなのかも知れない、そう考えた事もあったけれど、現実の久美子には、自分の手で育てる事が許されない！

この子の幸せの為にこの子を、慈しみ育てて下さる方が本当の親なのだと思うのだった。

久美子に与えられた時間の中で、この子への愛を全身で語り伝えようと思った。

そして、久美子は安らいだ気持ちで・・・

『心で語りかけた時、命の存在は答えてくれる！』

『力強く、動き、久美子のお腹を突き破るほど！』

ふと、そんな時の久美子はこの息づく命を限りなく、愛しく感じる瞬間だった。

そんな生活の中で久美子は子供を生んだ！

『子供は、男の子だった』

久美子の実家や、父、姉夫婦に知らせずに、久美子は子供が生れる三ヶ月前に仕事を退職して、ある、ボランティア団体のお世話になり、人知れず、運命の子を生んだのだった。

そして、その団体のお世話で、生れて直ぐに、子供は養子に出された。

子供の養父母には、久美子の事は知らないけれど、子供の生れた事情をすべて知ってもなお、大切に育ててくださる事を約束してくれた。

実家の姉夫婦は、久美子の変化に気づき、かなり、心配していたようだが、身内や親戚には、特に知られてはいけない子供の存在！

知られる事を必死で避けて隠した。

久美子は、最善の注意をして、身を隠しての行動だった。

生れた子をわが胸に一度も抱く事無く、久美子は養父母を信じてわが子を託した、久美子自身の体がまだ完全に快復しないままに、その場所を去った。

まるで、体の一部を引きち切られるような感覚の痛みを感じて、久美子は悲しさを押し消して、耐えた、ただ、ただ、生まれた子供の幸せを願って、一刻も早く、久美子自身の存在を消したかった。

そうしなくてはいけない、残酷な運命の子供を生んでしまった事の罪深さが悲しくて、辛くて、苦しかった。

そして、生んだわが子へ、心から詫びている。

ある程度、体も快復した頃、久美子は、実家の姉に連絡して、松本で会う約束をして出かけた。

もうその頃には、松本のアパートを、だいぶ前に引き払っていた。

姉は、その事を知らずにいたので、アパートへ行くからと強く言い張ったが・・・

どうやら、姉は、今回の久美子の雲隠れしていた事をとても気にしていて、久美子が、誰かと、同棲しているのではないかと、疑っていたようだった。

若い女の一人暮らしは、世間的にも、気になる事だった。久美子は、少し長いひとり旅をしていたと、ごまかして、姉を納得させた。

姉は、会う場所に、約束の時間にはもう来ていた。

そして、久美子の疲れた姿、やつれた姿を見て、いろいろと聞き、心配してくれたけれど、久美子は、旅の疲れが出ただけだと言い張って、姉を納得させた。

久美子は、松本での仕事を止めた事、そして、今は、東京に住んでいる事を話して、これからは、働きながら、大学で、絵の勉強する事を話して、少し足りない、大学の入学金を貸してほしいと、頼んだ。

姉は、とにかく、実家に戻るように言ったが、久美子は、もう、すでに、アルバイトも決まり、数日後から、働く事になっているので、今日はこのまま、東京に帰ると、強く、言い張って、入学金の一部を貸してくれるかを、確かめて、東京の下宿先の住所を書いたメモを渡して、「ここに、送金して欲しいと」言い残して、久美子は、姉から逃げるように、別れて、夜行列車に飛び乗った。

久美子の現実には、まだ、何も決まっていなかった。

働きながら、大学で、絵を勉強する事も、考えの中には確かにあったけれど、住む場所が決まっているだけで、仕事も、入学するはずの大学も決まっていなかったのが現実だった。

久美子の真実は、気力のない、疲れきった精神と体！

たとえどんな難路を生きて行くとしても歩きつづけて行くしかない！

全てがこれからの事、言い知れぬ不安が襲ってくる。

まだ、心が幼い私の試練

非常な運命を自ら背負い

いばらの道を進むしかない

自らの肉体を切り裂き

愛しさを捨て

ぬくもりを捨て

いとし子のご加護を

ただひたすらに祈る

(十四)

その頃、春馬は、久美子との愛を断ち切るために、身を切りきざむような苦しみに耐えていた！

遠洋漁業のマグロ捕り漁船に乗っていたのだった。

春馬は無理に肉体をこき使う事で、すべての欲情や苦しみに耐えられると考えた。

自分の肉体へ、復讐するような行為で乗り越えていた。

マグロ漁船で働く事は未経験な春馬だったが、知人の漁船乗組員に強引に頼み込んで、船に乗り、簡単に帰れない場所に、自分の身を置く事ですべての想いを断ち切れれると思った、それほど、春馬は煩悩と罪の意識とに相反する苦悩に追い詰められていた。

又、経済的な面でも、とても助かるし、魅力だったが、果たして、無事に帰れるかが、気がかりではあったけれど、これ以外では、春馬自身を変えて、生きる道はないのだと、硬く心に決めて船に乗った。

春馬の息子は、行き場の無い事もあり、伯父、甥の関係であり、又、久美子の父は、実の兄たちの手ひどい裏切りが辛く、人を信じられなかった、だから、気があう、春馬を一番の好きな弟として、心のよりどころとして親しみを感じたのかも知れない。

長く実家に預けられたままだった、春馬の息子を、久美子の父も、おそらく、大切に思っていたのだろう。

ほんの数日、春馬と匠は、松本のアパートで過ごして、又、久美子の実家に、息子を頼むしか、方法がなかった。

春馬が船に乗る事を知り、姉夫婦も預かる事を承知した。

春馬の息子「匠」はこうして、久美子の実家で高校卒業までここで暮していた。

そして、父の春馬から、半年に一度、高額のお金が送金されて来た。

それは、久美子の家族やまわりの者みんなが、聞いて、驚くほどの遠い国からの送金だった。

久美子は、春馬のそんな出来事をなんとなく耳に入って来たとしても、ひとり、苦しみや悲しみに耐えるしかなかった。

春馬との連絡をたち、密かに産んだ、わが子にも、逢うことなく、十数年の歳月が過ぎて行った。

その歳月のほとんどを、長野の実家にも帰らず、その生活は世間をはばかりの儀式のように、極めて、何事もなく装う久美子の本心なのか？

その長い歳月の間に久美子は、私学の短大を卒業して、今は、大手の商社に勤める、OLとして、生活！

世間の何処にでもいる

「普通の独身女性として生きて来た」

そんなある日、突然、久美子の住まいに、春馬の息子の『匠』
が、尋ねてきた。

「父からの預かり物を届けに来ました！」

と言って、匠はぎこちない態度で、一枚の絵を久美子に渡した！

久美子は糸魚川の駅で、春馬から何も告げられずに、突然別れてからもう十数年の歳月が過ぎた、久美子は、春馬との別れのあと、久美子自身が、考えもしていなかった、久美子の身に起きた、惨すぎる運命を苦しみの中で、家族の誰にも知られずに、乗り越える事が出来た！そして、今、やっと心の傷の痛さにもなれ！

たとえ、うわべだけでも、静かな生活に慣れて、落ち着きを感じ始めて来た。

あの辛い体験を心の奥底に隠して暮せると思い始めた時だった。

春馬の息子「匠」も今は、大学生になって、上京し、都内の大学の寮に下宿していた。

春馬は十数年ほど、マグロ漁船に乗って、匠の将来の為の資金をつくり、そのすべてを息子、匠に渡していた。

春馬は、長い間、息子の匠を久美子の実家に預けていたが、匠が、大学生になって後、しばらくして、マグロ船を降りた。

匠が独り立ち出来るだけの貯金もあり、匠を引き取りに来て、姉夫婦に、深く頭を下げて、お礼をのべ、匠を育てて貰った事に感謝を述べて、春馬と匠は久美子の実家を引き払った、だが、久美子に会いに来たのは匠だけだった。

微かな願いも虚しく、春馬は、久美子の前に現れる事など、期待出来ない事！

そう、久美子は春馬の気持ちを理解していた！

けれど、分かっている、やはり寂しく、悲しかった！

匠は、松本で、春馬とふたりで、宿に泊った時！

春馬から、これから春馬自身の生きて行く道を話して！この絵を、久美子に渡して欲しいとその時に、頼まれたと話した。

春馬は、これからは、匠自身の力で生きて行ってほしいと、言い残して、親子は別れたそうだ。

春馬のこれからの人生は、どうやら・・・

「出家し、お坊さんとしての修行をしている！」

そう言って、匠は、久美子に伝えた。

もちろん、久美子と春馬の間に男の子がいる事など、春馬も、匠も、知るはずも無く、久美子は、春馬と逢う事を願う事など、許されない！

久美子は、春馬の苦しい罪意識と深い想いを感じて、複雑な感情になって、どんな恋しさも、時間が解決してくれる事を願った。

春馬と久美子の狂おしいまでの愛も、お互いを思いやる心で、どうやら乗り越えたのだ。

久美子は、春馬がこれからの人生を仏門に入り生きる！

自分を律して、精神世界で生きて行く事を選んだ！

その事を聞いて、久美子は、なぜか、心の中でやすらぎさえ覚えた。

匠は、大学の寮で暮しながらも、いまだに、人付き合いが苦手のように、あの日以来、久美子に連絡もなしで、突然、尋ねて来るようになった！

春馬から託された絵を持参した、あの日、久美子は驚きと喜びの入り混じった混乱から、匠の生活の様子を聞いてあげる余裕がなかった。

「家族の愛やぬくもりに飢えていたのだろうか！」

匠が久美子の部屋を尋ねて来る時は、何か嫌な事でもあった時なのかひどくお酒に酔い、わけの分からぬ事を、わめきたて、辛さをこらえているような時が多い！

そうかと思えば、子供のように、久美子に甘えては、

「ねいちゃんは、僕を好きだよね！」、

「僕は、ねいちゃんが、大好きだったんだ！」

「僕をいつも、置き去りにして、何処へ行くの？」

そのような事を口走りながら、心の寂しさを、久美子に訴えて、そんな時、久美子はいつも、姉のような気持ちで、聞き役をしているだけだった、そして、ある夜、そのまま子供が泣き寝入って起きようとしないう匠を、久美子は仕方なく、そのまま、部屋に泊めてしまった！

その日から、数ヶ月が過ぎた！

匠は、時々、当然のように、久美子を訪ねて来ては、泊まる事が普通のことのように、

「ふたりは、自然な過ごし方になって行った！」

三十歳を過ぎてても独身でいる、久美子に、いよいよ、実家の姉は口うるさく姉として、家族として心配していた。

「結婚を勧めて来る！」

久美子は、どんな立派で、社会的に認められた男性を紹介されても、結婚する気持ちにはなれなかった。

また、仕事や、友人、知人の集まりで、男性と親しくなったとしても、「恋心や愛情を感じる事は無かった！」

しばらく、描いていなかった絵を又、描きはじめてみたり、普通のOLが楽しむ、旅行などにも出てみた。

なにをしても、友人たちとの付き合い程度で、特別に夢中になれる事も無く、「坦々とした歳月が過ぎて行く！」

いつしか、自然なかたちで、匠が、久美子と過ごす時間が多くなって行った。

匠は大学を卒業し、ある企業に就職してからは、どちらからとも無く、改めて、話さなくても、お互いが、一緒に生活する事も自然で不思議ではないのだと思うようになっていた。

だが、それは、男と女としての生活ではなく、久美子にとって、匠の存在そのものが「肉親のような感情！」

可愛い、歳のはなれた弟のようであり、

「息子のように思える感情があった。」

お互いが必要とする、家族のような関係でもあった。

お互いが、そばにいる事で、心が安らぎ、気持ちの安定さを感じられる存在だった。

(十五)

ふたりの生活は、お互いの恥ずかしい姿であっても、気づかいあう事も無く、自然体で見せ合えるほど、ごく日常的な暮しだった。

お互いの友人や知人へも姉であり、弟だと言えるし、誰もが、そう、見て、信じていた「ふたりの関係だった！」

いつしか、ふたりの生活は、趣味として、絵を描きはじめ、軽い競い合いの中で、心が意識なく安堵する思い！

日常の雑多な事から逃れられる！

大切な時間をふたりは楽しんで生活していた！

「たくちゃん、今日、なにが食べたい！」

「うん、そうだね、ねいちゃんの好きな物でいい！」

「じゃ、さあ～・・・」いつも、こんなふうに、気楽に話しては、笑顔を交し合える仲だった

。

だが、いつしか、匠は、久美子への呼び方を

「久美子ねいちゃんから！」

『久美ちゃん！』

と、極、自然に変わっていた。

久美子の気づかないところで、匠は、久美子を、女として、見て、恋心を抱き始めていた。

きっかけは、なんであったのかは、匠自身も分からぬままに、匠は、久美子を恋い慕う想いが日々募って行くことが、匠自身も戸惑いながら、あつい恋心をどうする事も出来ない、いらだちを止められずに、匠の若い感情で自身の心と体を持て余していた。

「匠の若き肉体は、男としての自然な働きをする！」

久美子を求めたい感情と姉と慕う感情のせめぎあいには、匠の苦しみは、耐え難いものだった。

そんな、匠の心の変化を久美子は、知ろうともせず、いや、久美子には、知る必要のない事だった。

『久美ちゃん！』

『久美ちゃん！』

わけもなく、久美子のそばで名を呼んでみる、匠の苦しい、息遣いと心情！辛うじて、理性が匠を抑えていた！

匠は、母を知らず、母の愛情がどんなものか、父である、春馬の生きざまを、否応無く背負わされた子だった。

久美子の実家にたどり着くまでの日々がどんなものであったかは、想像がつく！

春馬は、自分が久美子の父の腹違いの弟だと言う事以外は、何も話そうとしなかったし、誰もが、知ろうとせず、むしろ、知りたくない事だった。

久美子の父とはなぜか、気があう不思議さがあった。

だがその父も、数年前に、放蕩の限りを尽した人生だったが、最後は、あっけない命の終わりだった！

お酒に酔って、ふらついて歩いて、橋から川に転落して、即死状態だったが、発見されるまで、長い時間、誰にも見取られる事無く、父は死んだ、人は、いろいろと噂したが、性格も、顔立ちも、良く似ている久美子は、なんとなく、父のすべて、ではないまでも、父の気持ちが理解できた。

「どうしようもない目の前の現実！」

夢を求めすぎて感情との折り合いの付け方が出来ない、父はたぶん、人一倍生き方の下手な人間！

孤独に打ち勝つ事が出来ない、弱くて、寂しすぎた、人間だったのだろう、久美子は、そんな父を、今、好きな気がした。

父の本当の気持ちも、生き方も、理解出来る事ではなかったが、母を亡くして、寂しさを紛らわす為に、旅をして歩き、常にお酒を手放さず、夢物語の幻を見ては、そのすべての夢に裏切られつづけた、そんな生き方の繰り返しだった。

そうした、人生の中で、父は、春馬との出会いが、心の救いだったのかも知れない！

たとえ、真実はどうであれ、私たち家族は、父の言葉を信じて伯父として、春馬親子を受入れた。

久美子は、その結果を想像も出来ずに！

『あまりにも残酷な！』

『久美子と春馬の！』

『地獄をのぞき見る、愛があった！』

『どうする事も出来ずに！』

『ふたりは狂おしいまでの恋を断ち切った！』

『誰にも、知られずに！』

『隠し通さねばならぬ秘密を残して・・・』

どんなに、もがき、苦しんでも、時間という手助けが、これほどの力があることなのだと、今の

久美子は、心から感謝する思いだった。

過ぎて行く時間の中で、春馬の息子『匠』は実の弟であり、息子としての、肉親の久美子の愛情だった。

心の苦しさや耐え切れぬ寂しさと、孤独を癒してくれる存在でもあった。

突然の愛に戸惑いながら
母と姉の心で君を見ている
私の愛は君の後ろにいる人

そんな日々の中で、久美子が、常に、大切にしている、春馬から、おくられた、春馬自身が、幻の久美子の姿をモデルにして描いた。

『春の幻影』

こう名づけられた、春馬のこの絵をひと目みれば、久美子の美しい裸身を夢の中で、描き、追い求めている！

春馬の心が、久美子には、胸に迫る想いで、苦しいほど春馬を思い出している。

おそらくは、この絵を描きながら、春馬自身は、眼に見えぬ、火焰地獄を、乗り越えて、久美子を、幻の姿に変える事が出来た時に描けた絵なのだろう。

この絵が語り伝える、春馬の久美子を案ずる気持ちを、今、心揺さぶられながらも、久美子は、大人の女としての落ち着きを保てる微かな心の余裕を持てた。

そんな気持ちにさせたのも、匠の存在が大きかった！

誰よりも大切な家族としての心のよりどころでもあった、

『匠』

久美子には、実家に、はじめて来た、あの日の匠の姿を見ている感情だった、幼く可愛くて、ニコニコと、久美子を慕ってくれた。

「匠の無防備で、すがり付いてきた！」

「冷たくて小さな手！」

あの感覚が今も久美子の体を感じている。

あの、春馬への熱情をひた隠しに暮した日々も、匠は、姉として慕ってくれた。

久美子はそんな気持ちから、男として見ている感情はないと思っていた。

けれど、年齢を重ねるごとに、大人の男として成長して行った「匠」が、なにげなく一瞬、振り向いた時の姿は、否応無く、春馬を思い出させて、久美子と匠の関係は少しずつ、感情のずれを

感じてしまった。

そして、匠は、久美子に対する、母のような思いから、ひとりの女としての姿に、かわってしまった。

匠は、久美子に対して、いつしか、女性として恋する感情が芽生えてしまった、匠の若き肉体は、日に日に男を匂わせてくる！

もはや、久美子は、匠の存在に身も心も包み込まれてしまうのではないかと、恐れて、匠に対する接し方が、あきらかに変えていた。

「匠を呼び声さえも、豹変させて！」

「わざと、心無い、呼び方に変えて！」

匠も又、久美子への想いを、素直に伝えられぬいらだちで、時には、久美子に対して、他人に接するような、ぎこちない態度になってしまう、そしてある夜、匠は、久美子に告白した！

「ねいさんが好きです！」

「もう、僕を、男としてみて欲しい！」

「恋人としての付き合いをしてほしい！」

「ねいさんも、僕を好きだよね！」

「どうか、真剣に考えてほしい！」

そこまで、言った時、久美子は、匠の口を手でおさえて、もうそれ以上は、言わないで、お願いだからと、必死で、抑えた。

久美子には、匠からの告白が、苦しかった！

匠の父、春馬との禁じられた愛に苦しみ・・・

そして、存在さえも、隠さなくてはいけない子を産みながら、今、何処で、どんな風に、生きているのかさえも、知る事が出来ない、

『秘密！』

久美子は、あまりにも、苦しい生き方をしていた。

もう、人を恋する事など、許されるはずのない人間なのだ、久美子は自分で決めていた。

ほんの一瞬でも、匠に対して、女としての姿を見せてしまった事が悔やまれた!!!

(十六)

久美子は、匠に対して、もう、あれ以上の事を言わせてはいけないと、数日間、自宅には帰らずに、匠が、落ち着いて、気持ちの整理が出来る事を願っていた。

けれど、数日が過ぎた日に、自宅に帰ると、匠は、久美子の帰宅を待ちかねていた。

匠は、自分の想いを受け入れようとしない、久美子に、口にしてはいけない最後の言葉を、言ってしまった！

その言葉は、久美子が一番恐れていた事！

久美子に対して、徹底的に憎しみをこめた怒り！

匠の心は誰もが計り知れないほど傷つき、壊れてしまった、繊細すぎるほどの感性豊かな人間だったから、匠の心の怒りは、理性への反乱のように、久美子に浴びせた言葉は残酷な真実をあからさまにして！

「僕の存在は、あの春馬、父の代わりだったのだね！」

「僕が何も知らないと思っていたの！」

「僕はすべて、何もかも、知っているんだから！」

そう言って、久美子を責めた。

「匠の怒りに満ちた顔！」

「神聖だった想いは汚された怒りにかわった！」

もう、僕は久美子ねいちゃんとは、暮せない！

一緒に空気さえ吸えないし、食事と一緒に食べる事が出来ない、僕を突き放したのだよね！もう、ここにはいられない！

「僕は出て行く！」

ねいちゃんは、気が済むまで父を待つのだね！

ここで、ひとりで待つ暮しは寂しすぎるよ！

そう、久美子にはき捨てるように言って、「匠は家を出て行った。」

また私を孤独が呼んでいる

いつまでもつづくひとりの旅

心が張り裂けるまで心の旅はつづく

気まずく、心のわだかまりを残したまま、匠が出て行っても、久美子は、何も出来ない、匠に対して、いいわけも、何かの手助けをする事も出来なかった、匠に対して、女としての心づかいをしてはいけない事だと思い、わざと冷たくした。

久美子には、匠を愛する事も、受入れる資格も無い人間なのだ！

匠はもう、立派な大人で、社会人であり、自分に責任の持てる人間であるし、久美子自身のほうがむしろ、寂しさに耐えられるか、不安があった。

いざ、久美子はひとりになると、取り残された、孤独感に耐えられずにいた。

匠との暮らしは、ほんの些細な出来事にも、笑えあえる穏やかで心安らぐ空間を、匠は作ってくれていたのだった。

久美子は、ただ、時間が過ぎて行く事をたよりに生きて行くしかなかった、久美子は世間がどう動き、どんな事が起きているのかも気がつかないほど、何事にも興味を持たずにいても、人間の世界に住んでいれば、聞きたくない事でも、いろいろと知らせてくれる人がいる！

匠は、ここを出て行って間もなく、勤め先の同僚の女性と結婚したと知らせてくれた、相手の女性に望まれての結婚だと！

久美子は、心から喜び、祝ってあげたい気持ちだった。

匠が、久美子を忘れるための結婚であっても、相手の女性へ祈るような思いで、匠の幸せを願って、人づてに、結婚祝いの品を託した。

久美子と匠を知る人たちは、姉と弟としての認識でいるわけだから、ふたりの実情がどうであれ、偽りの心であっても、形式的な事を行うしかなかった。

虚しさが、久美子の心のコントロールを崩して行き、今すぐにでも誰かにすがりたいほど孤独な時間が怖い！

誰ひとり、知らないはずだった、久美子の愛のひみつを隠し通せると信じていた、愚かさが、暴かれてしまった、

「春馬と久美子の禁断の愛を！」

「若き日のあふれるほどの想いを！」

「たった二年の愛を交わした時間！」

「耐えようのない、熱情に負けて、犯した罪！」

「春馬と久美子のすべてをかけた三度の契り！」

そのすべてを知っていたと匠は久美子に浴びせた、呪うような言葉が、今の、久美子を苦しめ続けていた。

あの、恨みをこめた、最後に見せた匠の顔！

あの、かわいい弟として、たとえ、偽りであっても、息子のような感情で、久美子は匠に接して

いた。

けれど、やはり、偽りの感情を、匠は、鋭く見抜いていたのだろうか、久美子自身の匠へのつぐなうべき事も出来ない匠への仕打ちが許せなくて、益々、久美子自身の心を追い詰めて、身の置きどころをなくて行く！

「悔恨の思いが久美子を追い詰めて行く」

耐えることが出来ずに、久美子は、不確かな情報をたよりに、春馬に逢いたくて、旅に出た。

それは、何の確証もない、春馬の所在だった。

東北の山里にある、お寺で修行をしていると、かなり前に聞いていた、そのわずかな情報だけが久美子を奮い立たせての旅立ちだった。

列車を何度か乗り換えて、たどり着いて降りた、小さな駅舎には誰もいない無人の駅なのか、人の気配もなく、静ずか過ぎて、これから、久美子が向かおうとしている、行く先を暗示しているように思えて、胸騒ぎのような不安と怖いような緊張感を感じた、なにもかもが不可能な事のようにも思えた。

このひと気の無い、見知らぬ場所で、久美子はただ震える体を必死で支えて、耐えた！

久美子は、これからどうすれば良いのか、ただ、立ちすくんで久美子は心の中で祈った、きっと私を救ってくれる人が現われる！

春馬はきっと何処かで、私を見ていて守ってくれる！

その時を待つしかない！

いつだって、春馬は私を守ってくれていた、どんな困難にも、打ち勝つ力を与えてくれたと自分の心に言い聞かせていた。

「私はあと、どのくらいの時間をここで待てばいい！もう、夕暮れも近い！！

今夜の宿さえ、見当たらない、眼の前は山々が黒々と折り重なる風景！

これから、どうすれば良いのか、途方にくれていた時、この駅の駅員さんのようで、赤い線の入った帽子をかぶった男性、どう見ても、この辺の農家のおじさんの姿だ、たった今、野良仕事から、帰って来た！そのような姿だった、私の姿を何処かで見ていたように

「お客さん、すまんのう～、待たせちまったね～」

「隣のばあさんが、急に体の具合が悪くなって」

「町の医者のお所で、連れて行ってたもんでね～」

(十七)

確か、そんなふうな事を言ってるようだったが、久美子には、この人の話す言葉が上手く理解出来ないし、久美子自身のこれからの事で、緊張と不安でいっぱい、頭の中で混乱していた。久美子は、不確かな、お寺の名を言って、尋ねてみた！

「あの～ジョウカン寺はどちらにあるのでしょうか！」

「その寺に行くには、どう行けば、良いのでしょうか？」

すると、その人は、大笑いして！

「あんたさん、そんな寺は無いはな～」

と簡単に言われて、久美子は、益々、不安と混乱して、ただ焦って、どうすれば良いか、分からなくなった。

「とにかく、今夜は、もう、汽車も来ないし！」

「陽も暮れて、何処さも行けねな～」

「家さ、泊まるかね～」

「わし、ひとりだけだが、良いかね～」

「おら～年だから、男も出来ね～がな～」

なにを言おうとしているか、理解出来ない！

「良かったら、こらっせ！」

そう言って、久美子のかばんをいきなり持って、歩き出した。

予想もしていなかった、展開に久美子はうろたえたが、もはや、久美子は、この男に従うしかなかった。

しばらく、田んぼのあぜ道をその人について歩き、四～五十分ほどだったろうか、久美子は、足の痛さも感じないほど、緊張していたようで、この人の家に着いて、やっと少し、ほっとした時、身体中が痛かった。

足が靴ずれを起こしていて、血が出ていた事も気づかないほど、自分を見失っていたようだった。

家の中は、男ひとりで暮しているそうだが、こぎつぱりとした、片付いた部屋で、手早く、お茶を入れてくれた、こんな時、ふつう、女性はどんな態度をすればよいのだろうか？

澱んだ空気に苦しくても

今は従うしかないこの身

祈る想いが闇をひらいて

見知らぬ地で、全くの初対面の男性、自分で、「爺さん」だからと言ってたけれど、次々と、進んでいく思わぬ事で、すっかり、久美子は混乱していた。

「何も、ね～けど、飯だけは、うめ～から！」

「腹いっぱい～食べてくれや～」

そう言って、炊きたてのご飯をどんぶりに山盛り、よそってくれて、味噌汁ときゅうりのふるづけを久美子の目の前おいた。

あさから、ほとんど何も食べていなかった久美子は、ひと口食べたご飯が、とても美味しく感じて、少し心がおちついた気がした。

「風呂に入りて～だんろけど！」

「勘弁してくれや～」

なんだか、今日はめんどろだで～の～

「水が、こきたね～で～、やめとっあ～ね～」

独り言のように言って、何処か、外に出て行ったが、すぐに戻って来て、

「隠居部屋さ、布団しいといたで～」

「眠くなったら、寝てくんろ～」

そう言って、隣の座敷らしい部屋に入って行ったが、少しの時間で戻って来た。

お茶を入れてくれて、囲炉裏の火を気にしているように火ばしを急がしく、何度も、動かしながら、

「おめえさん、寺をさがしに来たかね～」

「この村の奥に、ゆ～こっく寺だが～」

確か、そ～つう、寺があるだで～よ～

「明日、行って、みつか～、案内してく～べ～」

そう言って、ちらっと、久美子の顔を覗き見た。

久美子は、待ち構えたように、聞いてみた！

「その寺に修行してる男の人がいますか？」

どうも、久美子の聞いた事が理解出来ないようで、

「寺にや～ふたりの坊さんがいるだで～」

「行ってみりや～、わかっぺ！」

そう言って、その後の言葉がつづかず、すこしの沈黙があつて、
「今日は疲れたべや～、早くねんべ～」

そう言って、立って行った。

久美子も、言われたように、別棟になっている、隠居部屋だとされるところへ移った。

もう、お布団も敷いてあつて、男ひとりで暮しているのに、不思議なほど、布団も、部屋もこぎれいに整頓されていて、気持ち良く寝る事が出来たけれど、久美子は、緊張がほぐれずに眼が冴えてほとんど眠れなかった。

次の日の朝、このおじさんの案内で、村はずれの、奥まった場所にお寺はあつた。

案内してくれたおじさんに、丁寧にお礼を言って、別れて、久美子ひとりで、たずねることになった。

案内してくれたおじさんは、どうやら、お坊さんとは、顔を会わせたくない様子だった。

この寺も、人のいる気配がしない、静まり返つた、空気が流れていて、久美子は苦しいほど体が硬くなって、前へ進もうとしても、思うように足が動かない！

さっきの案内してくれた、おじさんが、この寺の誰かと私を紹介してくれるか、話の橋渡しをしてくれるものと、勝手に決め込んでいた私は、少し落胆した思いだった。

やっとの思いで、寺の周りを見て歩き、とにかく、誰かに、たずねなくては、何も始まらない事だった。

(下巻につづく)

愛をこう人（上巻）

<http://p.booklog.jp/book/36402>

著者：みしまゆみこ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/hsa33712/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/36402>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/36402>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.